

うと僕は思つた。

しかし松坂では、

「こゝは三井家の發祥地で有名な金持町です。取引先の木綿問屋がありますから、私も歸途に寄つて見る積りです。」伊勢の松坂女郎衆の名所迷はさんすな歸らんせ。」といつて、こゝは昔から繁昌なところですよ。」

と無暗に力癪を入れた。

「その折お泊りでしたかね？」

と團さんが言つたとき、田鶴*

「有名な歌人ですわ。」敷島の大和心を人間はば」なら何ほお父さんでも御存知でせう？」



* 子さんが、

「鈴の屋翁の書齋もその儘に残つてゐるさうで△いますよ。」

「鈴の屋？ まさか待合ぢやあるまいね？」

「厭なお父さんね。本居宣長を御存知ないの？」

「知らないね。織田信長なら少し懇意だけれども。」

と團さんは悪い癖で文學者となると必ず茶化してかゝる。

と田鶴子さんも好くない傾向でお父さんを悉皆見括つてゐる。

「彼ならお父さんも知つてゐるさ。ふん、彼の人かい？ 専賣局の囑託だらう？ 安煙草の名を讀み込むだ手際は秀逸だと思つて常々敬服してゐるよ。」

と團さんは益々田鶴子さんを焦らした。

「時に今晚は何うしてもやはり古市泊りで△いますか？」

とお父さんが遺憾さうに老人に尋ねた。

「はい。古市へ泊つて伊勢音頭を見なければ話になりませんか。あなた方は何うでもやはり鳥羽で△いますか？」

と老人は憐れむやうに訊き返した。

「鳥羽は朝の海が何とも言へないさうで、伊勢へ行つたら鳥羽に限ると教へられて参りましてね、宿屋まで最早定めてあります。」

「海の景色は二見の日の出が好いさうで私は今夜は古市明晩は二見と定めてあります。伊勢音頭と日の出を御覽にならないのは惜う△いますよ。」

見物客の豫定は信仰箇條のやうなものだ。各自我が佛貴して、自分のが一番本式だと思ひ込む
でゐるから可笑しい。先輩から聞いた聊かの知識を根據として絶對的の斷定を下し、相手に選擇の
自由を許さないところは全く宗教に似てゐる。團さんの御賢兄の如きは、
『仙吉や、參宮を先に済ましてから鳥羽の皆春樓に泊つて、二見の浦は翌日廻しにすると一番手順
が宜いよ。伊賀の上野へはまだ日の高い中に着くから町を見物しても友忠でゆつくりできる。月が
瀬へは翌朝九時頃に自動車が出るから……』
といふ調子でもう疾うに梅が散つてゐるにも頓着なく自分の過去の日程を時間さへその儘僕達に踏
襲させやうとした。すべてかういふ理屈のものだから老人は不思議の御縁と喜びながらも豫定の變
更は思ひも寄らず、山田に着いたとき、
『それでは外宮から古市までは是非御一緒に願ひませう。四十年前でも會遊の地で△いますから私が
案内役を勤めますよ。
と言つて眞先に俵に乗つた。

* * * * *

お父さんと顔を洗ひに行くと、團さんがもう冷水摩擦をしてゐた。
『お早う。相變らず几帳面にやつてゐるね。』
とお父さんが褒めた。
『相變らずつて、僕は是でもう二十二年續けてゐるよ。』
と團さんは棒手拭で背中をグイグイやりながら答へた。
『些つとは効能があるのかい？』
『風邪をひかないこと不思議だね。君も一つ始めちや何うだ
い？』
『眞平だ、毎朝然麼に一生懸命になつて資本を入れるよりも
時稀風邪をひいて済崩しにする方が樂だよ。』
『無精な男さね。時に三輪君は眞正に弱つたのか知ら？』
『何に、チョコ／＼細君の顔が見たくなるのさ。』
田鶴子さんは疾うに身仕舞を済ませて縁側から海の景色を見晴らしてゐた。その傍の藤椅子に陣



取つた三輪さんは毎朝の常例として首を傾けながら脈を數へてゐる。

『何うだね？ 脈はあるかい？』

と團さんはお父さんと一緒に上つて來るとすぐに冷かした。

『實は感心してゐるところさ。毎日の過勞がまだ一向影響してゐない。家で學校へ行つてゐる時よりも忙しいのだから身體具合は悪くなつて宜い筈だけれどもね。』

と三輪さんは健康を害ねるのが目的のやうに答へた。

『冥利を知らない男さね。同じ忙しいんでも遊ぶのと働くのは違ふよ。餘程豪い仕事をしてゐる積りだから驚いて了ふ。』

と團さんが言つた。

『兎に角身體具合の好いのは結構だよ。時々里心を起すのは君の癖だから何とも思はないけれどもね。』

とお父さんも安心したやうだつた。

御飯が濟むと宿の亭主が出頭して挨拶を述べてから、

『今日は此から御參詣で△いますか？』

と尋ねた。

『否、外宮さんも内宮さんも昨日濟むで、今日はこの邊と二見さ。』

と團さんが答へた。

『左様で△いますか。お早いことで。鳥羽もこの附近の島めぐりをなさいますと丁度よろしい一日のお慰みになります。八十五島△いまして、すぐその坂手や桃取のやうなのは一島が一村で、役場も小學校も△います。』

『昨日登るときには大骨を折つたが、高いところ丈けに眺望は好いね。』

とお父さんは島だらけの海を見渡しながら言つた。

『この樋の山からの眺望は東洋第一だと申します。』

と亭主は忽ち大きく出て、

『今朝は生憎と霞むでありますが、好く晴れた日には富士山が一間半に見えます。』

『一間半とはどうして測定したのだらう？』

と團さんは數字が出るとすぐに理屈ボくなる。しかし亭主は、

『丁度一間半△いますな。』

と物指を當てたやうに繰り返して、説明の必要を認めなかつた。鳥羽の人は日の山公園は東洋一富士山は一間半と確信してゐる。

『兄貴め、僕の山登りの下手なのを知つてゐて、態々這麼素天邊の宿屋へ指して寄越しやがった。以後脚の弱いものに必ずこゝを推薦してやることだね。』

と團さんは景色には餘り興味を持つてゐない。

『東京も結構で△いませうが、男としては何と申してもやはりこの邊の島へ生れて來るのが二番の果報で△いますな。』と少時してから亭主はツクツク感じたやうに言ひ出した。



『何故ね?』

と今度は三輪さんが相手になつた。

『女房が皆海女で△いますからな。亭主は些つとも稼ぎませぬ。亭主一人養へないやうなら女の屑だと申すことになつてゐますから、この邊の島ぐるる男の樂なところはありませぬ。』

『それは耳よりな話だね。』

と團さんが喜んだ。

『亭主は女房が海の中でセッセと稼いでゐる間くはへ煙管で淨瑠璃を語りながら櫓を押してゐればそれでもう申分ないので△います。それに海女ほど貞操の堅いものはありません。裸體商賣だから風儀が悪からうと思ふと大間違で△います。亭主を大切にすること迎も類がありませんな。』

『食はせて大切にするんだから感心なものだね。お互のところ見たいに食はせてくれるから亭主が大切と言ふのとは段が違ふ。』

と團さんは益々嬉しがつた。

『海へ入つて鮑だの心太草だの眞珠だのを採るばかりでなく、畑の仕事まで一手に引き受けて決して亭主に迷惑を掛けません。それですから私も女房に申すので△います——「海女を見なさい、海

女を」とね。」

「何うだね、海女は、器量は？」

「左様さ、何分水につかるので大概ふやけてゐますが、時には相應綺麗なのも△います。」

「器量が好くて、亭主を大切に、裸體商賣だから無論着物は欲しがらなくて……」

と團さんが長所を數へ立てると、

「要するにお互の女房とは全く反對の美點を具備してゐる。」

と三輪さんが言ひ、お父さんも、

「僕達は今更仕方がないけれど、若い人にはこの島へ婚に来るやうに勸めてやるんだね。好いこ

とを聞いたよ。もう何か他に珍らしい話はありませんか？」

「左様で△いますな。昨日相の山でお杉とお玉の踊りを御覧になりましたか？」

「彼は見たが、昔から名物になつてゐる程のものでもないやうだね。」

「彼にまつ伊勢音頭で△いますな、御覧になるものは。」

「伊勢音頭で思ひ出したが、芝居でやる彼の古市の油屋は今もうないやうだね。」

「有りますとも、相の山から古市へ入ると右側に油屋旅館といふのが△いましたらう？ 彼で△いますよ。」

「彼かい？ しまつた。昨日彼處で晝飯を喰べて連れの人に別れたんだが、たゞの宿屋ぢやないか？」

「今は宿屋で△いますが、彼がその「伊勢音頭」の油屋で、お紺の使つた品物や貢の刀痕のついた襖や衝立が現に残つてをります。折角お寄りになつて惜いことを致しましたな。」

「つい宿屋だとばかり思つてゐたもんだからね。道理で彼の老人も古市へきて油屋へ泊らなくちやと頻に言つてゐた。實際惜いことをしたよ。」

「又黴菌趣味か。古道具の疵物なんか何うでも宜いぢやないか。」

と團さんは海女の話ほどに力を入れない。しかし亭主は、

「油屋の白井さんはナカ／＼の豪物で△いますよ。先代が亡くなるとすぐに抱への女郎衆を悉皆親元へ歸してやつて旅館に商賣替を致しました。思想の進む人はすることが違ひますな。迎も私共には眞似のできない藝當て△います。」

と古市の話を續けた。

『一美談ですな。』

と三輪さんが感心した。

『白井何といひますか？』

とお父さんは手帳を取り出した。這麼ことをときどき書き留めたりするところを見るとビックウイ
ク・ペーパーズも萬更口ばかりぢやないのか知らと僕は思った。尤も團さんは、

『救世軍へでも報告するのかい？』

と冷かしてやはり信用してゐなかつた。

『もう何か他に面白い話はないかね？』

『然様で△いますな。』

と亭主はかういふ閑人にかゝり合つては困るのだらうが、

『お木曳きが一寸見物で△いますな。』

『お木曳きといふと？』

とお父さんは言葉の意味から訊いてかゝつた。豫備知識の全くない連中だから先生も並大抵でな
い。一々根元から説明しなければならぬ。

内宮さんも、外宮さんも二十一

年目には必ず御改築になります

が、その折土地の者が總出にな

つて材木を曳くので△います。

『伊勢は津で持つ津は伊勢で持

つ、尾張名古屋は城で持つ、あ

れやいせ、これやいせ』と歌ひ

ながら町を練つて歩くところは

オカ／＼景氣のよろしいもの*

様の御利益、何も彼も一切萬事お伊勢様の御利益、有難いことぢや』といふ意味で△いますから



*で△います。

『成程、名古屋の城の石を運ぶ

歌を借用するんだね。』

と三輪さんは團さんの曲解を鷄

呑みにして學殖を銜つた。

『否、此方の木を曳く歌で△い

ます。』

と亭主は稍驚たいやうで、

『さうして「あれやいせ、これ

やいせ」と申すのも「あれはお

伊勢様の御利益、これはお伊勢

な。』

といかにも道理らしい解釋を施した。

上り下りに馬鹿骨が折れる丈けに樋の山はるながらにして城趾でも日和山でも一目に見えるから一々足を運ぶ手間が省ける。そこで見物はもう済むだことにして、僕達は山を下りるとすぐに停車場へ志した。

『鳥羽は眞珠の名産地だよ。嵩張らない物だから何程でも買つて行き給へ。』
と團さんは町中へきた時買ひ物好きのお父さんと三輪さんに譚つた。

『田鶴子さん、眞珠を買つてお貰ひなさいな。こゝは眞珠が名産ださうですから好い記念になりますよ。』

とお父さんは復讐の積りが早速田鶴子さんに意地をつけた。

『買つてやるよ。しかし眞珠で候とお呪禁ぐらゐるの小粒は物欲しさうで厭なものさ。拳ほどのがあつたら買つてやるよ。』

『田鶴子さん、宜いですか？ 大きいのを買つて貰ふんですよ。』

と三輪さんも入れ智慧をした。

這麼冗談を言ひ合つてゐる中に僕達は土産物の賣店へ入つたのだから呼び込まれたのだから了つた。番頭が頻りに品物を並べる。田鶴子さんがそれを一々手に取つて検める。三輪さんやお父さんまで種々と漁り始めた。

『田鶴子、この邊のは何うだね？』

と團さんは幾度か田鶴子さんの御機嫌を伺つたが駄目だつた。

僕は待つてゐる間に先頃お母さんと天賞堂へいつた時のことを思ひ出した。夫婦だか兄妹だか兎に角若い男女が女持ちの金時計を買ひに來てゐた。男の人が品物を吟味して相談を掛ける度に女人は横を向いた。参考のために僕が回数を勘定し始めた頃には婦人殿下は首をあべこべに笹けたお雛様のやうになつてゐた。さうして一番好いのを差しつけられた時漸く舊に戻つた女優の栽培地が初めて領いた。彼が夫婦なら家へ歸つてから一波瀾あつたらう。若し兄妹だつたら兄さんは懲り懲りしたに相違ない。田鶴子さんも子供ながら、この邊の呼吸を相應に心得てゐると見えて、幾度か外向を向いた末、大きな眞珠の入つた襟留を買つて貰つた。

『うっかり口を利くもんぢやないね。ひどい目に遭つたよ。』
と團さんが零した。

間もなく停車場に着いた。水兵が大勢参宮にでも出掛けるところと見えて整列してゐた。

『軍港かね、こゝは？』

とお父さんが訊いた。

『軍港ぢやないけれど軍艦が始終来るらしいね。先刻も二三艘見えたらう？
水兵と鐵工所の職工
で持つてゐると彼の亭主も言つたぢやないか？』

と團さんが答へた。

『水兵は陸軍の兵隊と違つていかにも愉快さうだね。皆ニコ／＼してゐる。服が子供のやうだから
可愛らしい。』

と三輪さんは整列のすぐ側で言つた。僕は水兵が怒りはしまいかと心配した。

『それは練兵や行軍の時とは違ふさ。かうやつて勢揃ひをして遊びに出掛けるんだもの。尤も陸軍
は強制だけれども此連中は皆志願だから、其邊の關係もあるだらうね。實際愉快さうにやつてゐる

ね。』

と團さんも青ジャケット達を打目成つた。

『以前は兵隊が叔父さんのやうに見えたもんだが、この頃は
若くなつたね。將校にも這磨子供に戦争ができるか知らと思
ふやうなのがあるが、それ丈け此方の年が寄つたんだね。』
とお父さんも海兵を材料にして感想を述べた。

二見の浦で下りて夫婦岩へ行く途中、海岸へ出ると、軒並
に壺焼屋が葎賣小屋を構へてゐる。

『お嬢さん榮螺の壺焼をお喰りなしていらつしやい。名物で
△います。』

『坊ちゃん榮螺の壺焼をお喰りなしていらつしやい。理科の
参考にもなります。』

と一々名を指して呼びかける。



『田鶴子も謙さんも餘程喰べたさうな顔をしてゐると見えるよ。一つ喰べてゆかうか。』
と團さんは僕達に託けて、割合に綺麗な店へ差しかゝつた時腰を下した。
『不消化物らしいね。』

と躊躇した三輪さんも一人前平けて、

『この尻尾のような青いところも喰べられるのかい？』
と念を押し、

『尻は胃病の薬ですよ。』

と女中に教へられて殻丈けは残した。

夫婦岩は甚だ評判が悪かつた。

『是は一寸詐欺にかゝつたような氣持がするね。これぐらゐの岩なら大抵の海岸にある。』
とお父さんが言ふと、團さんも、

『寫眞では彼の玩具の鳥居が眞物に見えるから餘程巨大な岩だと思ひ込む。比例尺を普通の鳥居の現寸大と考へさせるところが手だ。』

『この石垣が又俗悪だね。宛然江の島で賣つてゐる介細工の筆立見たいだ。』
と三輪さんに至つては側石垣まで貶した。

第八回

豫定の時刻に伊賀の上野に着いたが、迎へに出てくれる筈だつた三輪さんのお弟子の姿が見えない。電報は相役の田鶴子さんの文案通り僕が認めて昨夜の中に鳥羽から打つて貰つたのだが、何うしたのだらう？

『君が平常時間通りに學校へ出ないもんだから今日も一汽車や二汽車は後れると思つてゐるんぢやないかい？』

とお父さんが言つた。

『まさか。僕もこれで學校の時間丈けは几帳面だよ。ことによると電文が不明瞭だつたのぢやなからうか。』

と三輪さんはお弟子の責任を田鶴子さんと僕に轉嫁しやうとした。

『斯うやつて待つてゐてもはじまらない。兎に角上野へ行つて宿屋へ落ちつくとしやうぢやないか？』

と團さんは赤帽に切符を買ひにやつた。

『上野へ行くつて、此處が上野だらう？ 伊賀上野とちやんと書いてある。』

『否、眞正の上野はもつと先きだ。此處で乗り替へるんだよ。』

間もなく僕達は玩具のやうな汽車へ押し込められた。輕便鐵道といふのださうだが、狭くて遅い上にガタ／＼して一向便利でない。

『英語では輕鐵道だね。便の字は些とも入つてゐない。これを輕便鐵道といふのは君達のやる誤譯の一例だね。』

と團さんが悪口を言つた。

『今の上野は偽物の上野かね？』

と三輪さんはまだ上野を氣にしてゐた。

『偽物といふ次第でもないけれど、上野の町はこの先きさ。驛が田圃の中にあつて町は一里も二里も奥に引つ込むでゐるやうなところがよくあるよ。さういふ地方に限つて發展が後れてゐる。自分達の頑冥不靈がいつまでも祟るんだから今更何を怨みやうもないのさ。』

『何うして？』

『鐵道の出來初めには陸蒸氣が通ると泥棒が入り込むとか物産を悉皆持つて行かれて了ふとか妙に消極的なことばかり考へて、田舎は大抵二の足を踏むものださうだよ。その中でも分別のある地方は、何うせ通るものなら仕方がないから、驛を成るべく町から離してくれりやうにと政府へ運動して成功したんだね。驛から大分遠いところを見ると、上野もこの頃になつて後悔してゐる組だぜ。』

『成程ね。山の中で人智の進まないところだらうからね。それで今更輕便鐵道でつき足して騒ぎを入れてゐるのかも知れない。』

と二人は土地の人達が乗つてゐるのに勝手な熱を吹いてゐる。

『はい、友忠といふのですが、下りてから餘程△いますか？』

とお父さんは隣席の商人體と話を始めた。



「友忠さんなら東大手でお下りなされ。」

と商人が教へてくれた。

「否、西大手が近うあす。三町ぐらゐです。」

と商人の連れの中老が口を出した。

「三町といふことはありませんよ。東大手から五町代、西大手からは七町ありますよ。」

「否、西大手から三町です。私はつい筋向うですから始終試してゐますが、東大手よりは煙草を一服喫つてお茶を一抔飲むほど早うあす。」

と雙方とつて譲らず、結果中老が僕達を宿屋まで案内してくれることになつた。伊賀の人は親切で強情だと僕は思った。

何うでも宜い問題だけれど物好きに道程を測りながら歩いたら、確に七町はあつた。それでも中老

は、

「何うです？ 近うあせう？」

と確信的にいつて別れた。

「まあ、一服やつてお茶を飲むほど儲かつたんだから。」

とその儘神輿を据ゑて了つたがる團さんを促して、僕達はまづ見物を果すために宿屋を出た。

伴に乗るほどのこともなからうと高を括つてブラ／＼歩き始めたが、伊賀の上野はそのお手本の東京の上野よりか餘程廣い。成り上りのひよろ長町ではなくて、人間同様榮養の好いのは必ず横幅があるといふ團さんの都會の定義にしつくり合つてゐる。芭蕉翁の故郷塚を尋ね當て、木像に拜面するまでに、

「もし、愛染はんは此方へ参りますか？」

とお父さんは訊き方を呑み込むで了つた。芭蕉翁と言つても通りがりの人には通じない。續いて養蠱庵へ向つた折にも、

「一寸お尋ね致しますが、この邊に養蠱庵といふのありませんか？」

『知りまへんなあ、然麼ものは。』

『芭蕉はんのゐたところで、この見當だと聞いて参りましたが……。』

『芭蕉はん？ 然麼人存じまへんなあ。』

といつた調子だつた。

『驚いたね。何人も知らない。翁も案外人氣がないんだね。やはり豫言者は故郷に尊ばれないの
知ら？』

とお父さんは頻に首を傾けてゐた。

『君、相手が悪いんだよ。先刻から選りに選つて女子供やヨボく爺さんにばかり訊いてゐるから
さ。』

と三輪さんが注意した。

『要するに發句なんてものは現代生活に没交渉だといふ證明さ。あ、腹が空つた。』

と團さんは芭蕉が俳人だといふことだけは知つてゐるやうだつた。

漸く探し當てた揚句の果が、庵は今では個人の別荘とあつて門が閉つてゐた。

『これでは町の人も知らない筈だよ。住宅になつてゐるんだもの。』

とお父さんは翁のために辯じたが、拜見させて戴くのに又少時手間をとつたので、

『何うも君達は物見高くて困る。這麼安普請が然麼に有難いのかなあ。』
と腹のへつた團さんは頗る不平らしかつた。

『僕も大分草臥た。今度は鍵屋の辻だが、案内者がゐないから、嘸又まごつくことだらう。今日こそは久しぶりで少し樂ができると思つてゐたら、電報が間違つたばかりにとんだ目に遭ふ。』
と三輪さんも零した。

『厭な人ねえ！ 皆私達の所爲にして。』

と田鶴子さんは僕に目くばせをして三輪さんを睨むだ。

『もう洋服を着るときにお手傳ひをしてやらない方が宜いですよ。』
と僕も朋輩の好みで意地をつけてやつた。

『君、蓑蟲庵が妙に現代的に頭腦に泌み込むでゐると思つてゐたら、彼處は根上君の舊居だつた
よ。』

とお父さんは他の思惑には頓着なくやはり翁の遺跡を問題にして振り返りながら言つた。

『さう／＼。根上君は芭蕉の研究がてらこの邊の中學へ來てゐたことがあつたね。』

と三輪さんは古いことを思ひ出したやうに答へた。

『一つ葉書を出してやるかな。彼の養蠶庵で初めて世帯をもつたと言つてゐたよ。さうしてそれがナカ／＼お安くないんだぜ。中學校に運動會があつた時、若い綺麗な女學校の先生が生徒を引率して見物に來たんだとさ。すると先生忽ち見惚れて了つて、茫然自失、運動會は其方除けて、唯々……。』

『何方の先生だい？』

『何方も先生さ。生徒なら差詰め退學處分だね。』

『否、何方の先生が見惚れたといふのさ？』

『それは無論男の方が女の方に見惚れたのさ。女が男に見惚れて了つてバツタリと扇子を落す拍子に木の入るのは遺憾ながら芝居の舞臺だけだよ。』

『何だつて？ 見惚れてゐるところを寫眞に撮られたつて？』

と傳さんが寄つて來た。

『否、安心し給へ。君の彼の話ぢやないよ。しかし君は根上君は知らないね。ところで側にゐた校長がそれと察して、「お氣に召しましたかな？ 何なら媒妁の勞をとりませうか？」……と戯談を言つたさうだ。すると根上君はどこまでも眞剣で、「どうぞお願ひ致します。私の家は今は東京で商賣をやつてゐますが、先祖は代々近江にゐて、清和源氏の末裔で△います」とかと、系圖まで曝け出して血相を變へてゐた。かういふところは、如何にも天真爛漫で、俳人氣質丸出したね。彼の人の句に「蝸牛や清和源氏が鼻の下」といふのがあるが、恐らくこのときの感想を現したものだらう。

細君を貰つたり、句を讀むたり、根上君もこゝでは大分活動したらしい。』

『何ういふ意味だらう、その鼻の下といふのは？』

と三輪さんが解釋に苦しむだ。

『彼の瞬間の鼻の下は蓋し蝸牛を宿すに足つたらうといふ述懐さ。まひまひつぶろといふ奴は鈍間の表象だからこの際調和が好い。それに一つところに凝つとしてゐないから、これで鼻の下の寸法が可なり長く現れてゐる。』

とお父さんは眞面目になつて説明した。

『下らないことを言つてゐるぜ。』

と團さんが早足になると、

『團君の話といふのは何うしたんだい？』

と又三輪さんが訊いた。

『彼は證跡が天下に發表されて了つたんだから今更匿すにも及ばなからう。團君、彼の事件はいつの花の日會だつたかね？』

『馬鹿ばかり言つてゐると日が暮れて了ふぜ。』

と言つて團さんは田鶴子さんを魔いた。

『二三年前の花の日に團君が銀座で何處かの若い令夫人から造花を買つたと思ひ給へ。するとその場を新聞記者が寫眞に撮つて夕刊に出したんだね。團君は決して見惚れたんぢやないと言ふが、何人が判定しても凜然とはしてゐない。殊に細君は、這麼器量も好くない方に花を挿して貰つてニタ／＼してゐるところは不見識といふものですよ』と手酷しく團君を極めつけたさうだ。兎に

角可なり間が伸びてゐて何うしても物議の種になる寫眞だね。参考のために切り抜いて置いたから御希望なら今度お目にかけてやう。』

『それは團君も退引ならぬね。僕の學校にも丁度然麼か、

り合ひに遭つた男がゐるよ。』

と三輪さんは草臥れたとは言ひながらも早く歸つて休まうといふ分別がない。さうして、

『去年から婦人の聴講を許した

ところが、數名の志望者があつた。そのうち一人が水際立つた*

張してゐるだが、要するに五十歩百歩さ。やはり團君式に餘程間が伸びてゐたよ。さうしてその男が



美人だつたので、學生の注目を

惹くばかりか、時折教員室の話

題に上つてゐたんだね。すると

或日のこと新聞の學校記者とい

ふのがきて、その美人の登校姿

をキヤメラにをさめた。ところが

が教師が一人一緒に寫つて了つた。新聞は社會の縮圖だといふから、かういふものが出ると眞に具合が悪い。見惚れたのではなくて見つめたのだと當人は主

生憎獨身者だつたので、なほ／＼話に花が咲いた。人の悪い奴がその新聞の寫眞に題して、曰く、「獨身主義者の悲哀」さ。穿ち得て妙だらう？」

「成程、巧いね。その先生といひ團君といひまた根上君といひ、揃ひも揃つたもんさ。して見るとポーブの名句も The proper study of mankind is woman と訂正しなければならぬことにならね。」

とお父さんが嬉しがつた。西洋人の言葉を引合に出すときは悦に入つた絶頂だ。

トボ／＼頃宿へ戻つてお湯に入り御飯を喰へ始めたが、土地の知人がゐないと一向話かはづまない。女中方はお給仕が本務だから、一々質問を答へる責任はないと信じてゐるらしく、何を訊いても「はい」とか「いゝえ」とか唯の一口で片付けて了ふ。お父さんは餘程努めたが、

「はい、藤堂様であす、こゝの殿様は。」

「伯爵だねえ？」

「はい。」

「子爵だつたかな？」

「さあ。」

「やつぱり伯爵かい？」

「以前は伯爵であしたが、いまは何をしてゐますかしら。」

といふくらゐが關の山で全くとりつく島もなかつた。ところへバタバタバタと階段を踏み鳴らして入つてきた青年紳士があつた。

「先生、皆さん、何うも飛んだ失禮を致しました。」

といふ挨拶で、これが三輪さんの遅刻のお弟子松本さんとすぐ知れた。

「電報が間違つたらう？ 子供委せにして置いたもんだから。」

と三輪先生が大きく出た。尤もお弟子さんの手前、このお子さん達が身の邊の世話をしてくれるので、漸くこゝまで出てきましたとは告白しかねたらう。

「否、電報は昨晚確に戴きましたが、氣を利かして龜山までお迎ひに出掛けたのがソモ／＼間違の因でした。」

と答へて、松本さんは、

「姐さん、私にも御飯を持つてきてお呉れ。御一緒に失禮することにしませう。早速で済まないが、急いでね。」

と命じた。物の爲こなしや言ひ廻しが先生より餘程世間慣れてゐる。

「謙さん、電報が着いて宜うございましたね。」

と田鶴子さんが態とらしく僕を顧みた。

「眞正に宜うございましたね。」

と僕も意を體して應じた。しかし三輪さんは、

「それは打つた電報ですもの、着かなけりや間違です。」

と今更のやうに教へてくれた。些とも手答がない。

「皆私の失策ですよ。その次第は後刻ゆつくり申上げますが、要するに伊賀の國風が悪いのですな。」

と却つてお弟子さんの方へ響いたので氣の毒でならなかつた。

食事が済むと、田鶴子さんと僕は例によつて夫れく家への通信事務に従つた。必要は發明の

母なりといふ通り、毎日手紙を書かされると自然種々な簡便法を思ひつく。昨日は筆紙に盡し難しといふ句を應用してみた。此奴は頗る調法だ。好い景色は大抵これで間に合ふ。今日は餘は後便にていとふのを利用した。これは草臥れた時に至つて便利だ。今日伊賀の上野見物、餘は後便にて」で充分用が足りる。殊に繪ハガキを使ふと餘白が少いから勞を省いた形跡は些とも見えない。大抵の約束には履行の責任が伴ふけれど、後便丈は催促を受けて裁判沙汰になつたといふ例を聞かない。後便なる哉後便なる哉！お母さんへも三輪さんの家へも發明序に日本橋の鬼瓦のところに後便で御機嫌を伺つて、後便は最良の方便だと思つてゐると、松本さんが小便の話を始めた。「尾籠なことを申して甚だ恐れ入りますが、この伊賀の國ほど小便の出るところは天下にありませんな。實は今日もその小便で思はぬ不覺をとつたのです。龜山までお出迎ひに参りましたが、時間があつたので一寸親戚へ寄りました。つい話し込むで了つて、停車場へ駈けつける途中伊賀名物の小用を催しましてな、又知合の家へ飛び込むといふ騒ぎです。その結果出迎へる積りの先生方の汽車を蔭ながら御見送りしたやうな仕末になつて了りました。馬鹿くしくしてお話になりません。」

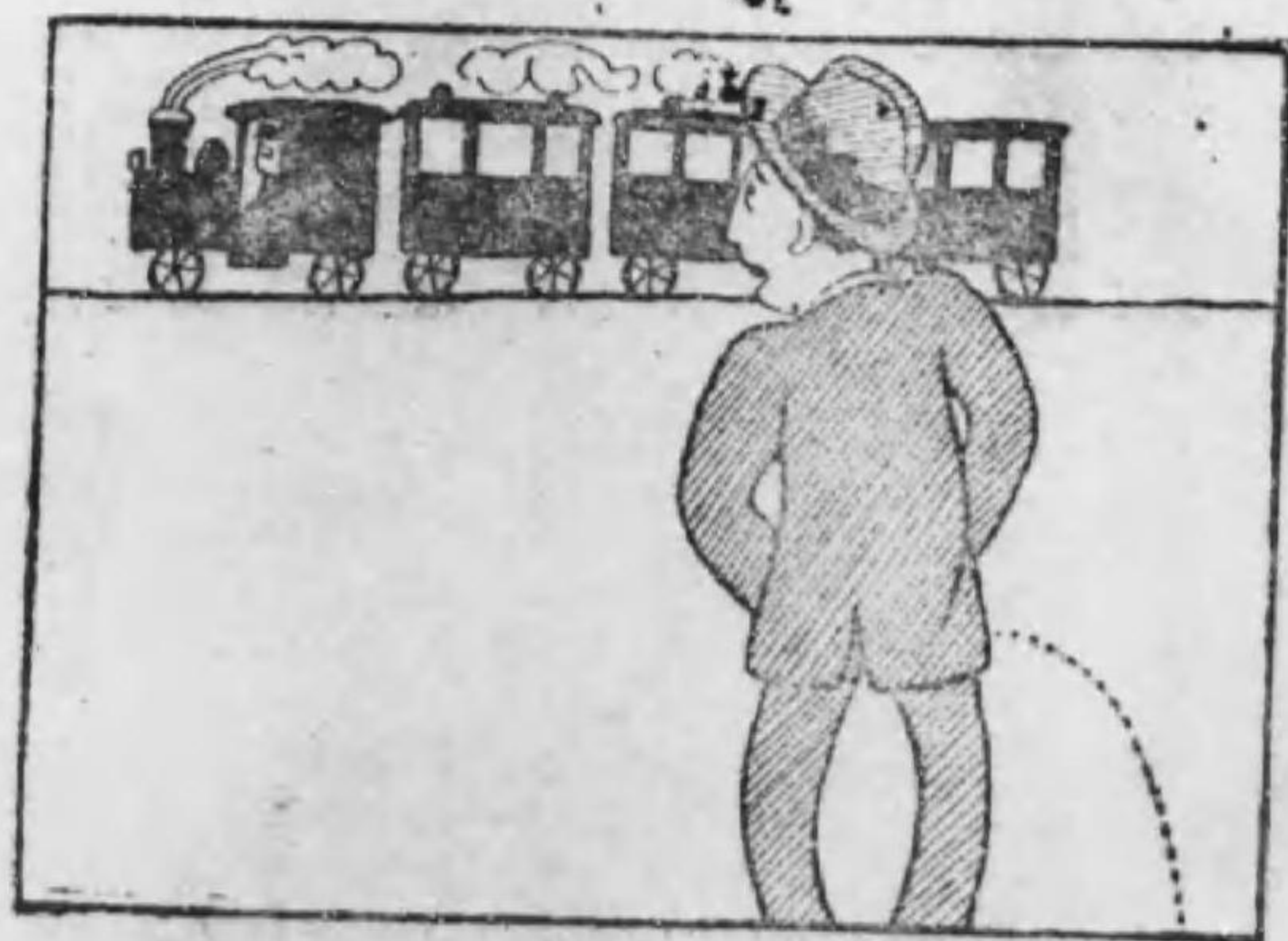
「何ういふ次第だらうね？ 小便淋瀝といつて出の悪い方の病氣はあるやうだが、さう無暗に出る

のは聞いたことがない。しかしやつぱり一種の地方病だらうね？」
と三輪さんが訊いた。神経衰弱は何でも病気で釋明しようとな
努める。

「否、病氣ぢやありません。この地方では少くとも一日に一
回は粥を喰べるのが昔から不文律になつてゐますから、自然
尿利が好くなり過ぎるのでした。」

「は、あ、お粥を喰べますか？」
とお父さんがその後を促した。

「朝とか晩とか又は朝晩二回とかと貧乏人でも金持でも必ず
粥を喰べて米の節約をすることになつてゐます。これは昔饑
饉のあつた時お布令が出たのをその儘守つてゐるのだと申し
ます。そこで彼處の家では顔の映るやうな茶粥を喰べてゐる
といふ形容が起つて來ますが、お分りですか？」



「さあ、東京の下宿屋の味噌汁と同じ關係ですかね？」

と團さんは書生時代の經驗から柄になく正鵠を得た。

「さうです、彼處の家は貧乏だといふことをさう申します。」

「芭蕉の句の「馬に寝ねて残夢月遠し茶の烟」といふのがその茶粥を炊く煙ださうですが、一體什
麼もんですか？」

とお父さんが六ヶ敷く出た。

「何でもありませんよ。たゞ茶を入れて煮た粥です。それに麥を交ぜたのを麥茶粥といひます。小
豆を入れたのが小豆茶粥、芋を入れれば芋茶粥です。」

「麥茶粥に小豆茶粥に芋茶粥と。ナカ／＼種類がありますな。」

「まだ餅茶粥といふのがあります。これは主に冬分寒さ凌ぎに喰べます。」

「餅茶粥と。これで五つになりますな。お待ち下さいよ。餅茶粥は寒さ凌ぎと。冬はやはり寒い
すか？」

「寒い何のと申して、伊賀の上野は高丘で寒い」と昔から歌にもなつてゐるくらゐで、随分底冷

えがします。そこへもつてきて皆天井の映るやうな粥腹でせう。小便が出ざるを得ませんや。關東の連れ小便といひますが、實は伊賀の連れ小便です。中學生等も登校の途中、「おい、小便しやうか？」と言ひ出すのが一種の禮節になつてゐます。』
と松本さんはお粥から又本題へ戻つたが、

『いや、遅參の申譯からとんだ尾籠な話になつて了つて恐縮です。これからはもつと奇麗なところを申上げませう。伊勢からお出になると何方もまづ此方の人の色の白いのに驚くさうですが、實際伊賀はこれで美人系ですからね。この町にも随分奇麗な女がゐります。』

『さうですか。ついつつかりしてゐて氣が付きませんでしたよ。』
と團さんが言つた。

『それで根上君も見惚れたんだね。しかし君は美人系らしくもないぢやなか。第一色が黒い。原則を證明する例外といふ組かね？』
と三輪さんは思ふ通りを口に出す。

『私のは東京の影響です。これでも伊勢の人よりは白いのです。私の姉婚は伊勢から來ましたが、

私ほどの色になるのに五年かゝりましたよ。彼方の方は潮風に吹かれるから實に黒いです。』

『小便系と美人系ですな。』

とお父さんは手帳に認めた。

『その美人系もこの上野が中心です。妙なお話ばかりするやうですが、この土地は有名な妾宅地です。伊賀では上野に妾宅を構へてゐないものは紳士といへないことになつてゐます。』

『成程、東京でも結局其處へ歸着しますね。あなたはまだ紳士の資格がありませんか？』
と團さんが笑ひながら訊いた。

『前途遼遠ですな。親爺の脛を嚙つて銀行へ出てゐるんですもの、逆もあかんです。』
と松本さんは然も心細さうに言つた。

田鶴子さんはまだ手紙を書いてゐるが、この時、

『謙さん、あなたは今日も繪ハガキで済まして了つて眞正に狡いわね。私、鑓屋の辻でまだ手間をとつてゐるのよ、彼處は「ひだり奈良道」でしたかね？』
と僕に確めた。

『ひだり奈良道ですよ。』

と松本さんが答へた。さうして、

『彼處は上野一番の名所です。白鳳城を知らなくても鍵屋の辻を知らないものはありません。伊賀越は忠臣蔵や曾我物語と共に日本の三大仇討になつてゐますからな。なほその大立物の荒木又右衛門が矢張り伊賀の人ですから、鍵屋の辻は純國産の舊蹟で私達も鼻が高いのです。』

と約三百年前の経緯を子供の時分に目撃した出来事のやうに物語り始めた。例へば、

『又五郎の一行を待ちうけてゐる間に又右衛門は數馬その他二名のもと彼の辻の飲食店で腹持へを致しました。伊賀の人でしたが、此日は特に茶粥を控へました。切合最中に差支へては困ると思つたのでせう。何を喰べたかと申すと蕎麥と鯛だつたさうです。蕎麥は側に通じ、



鯛は當地の方言の果すに似てゐます。蕎麥で鯛、即ちその場でやつつけて了ふと縁起を祝つたのです。小便の用心をしたところは私よりも先見の明がありますが、矢張り迷信家だつたと見えます。この飲食店もつい先年まで残つてゐましたよ。』

といつた行き方でこれが尠からず興を添へた。

鯛された連中の後始末から松本さんは白鳳城の紹介に移つて、

『若し竣成したら確に日本一の名城になるところでした。』

と残念がつた。天神さまのお祭典に就いても、

『この山車が皆徳川時代のものばかりです。近郷近在から雲霞と人が出てその盛んなこと京都の祇園祭を除ければ恐らく日本一です。』

と言つた。この筆法に従ふと伊賀の上野もそれより大きな町を悉皆除ければ間違ひなく日本一の都會になる。物産論に入つては米を首位とした。さうして、

『伊賀の「關取」ときたら何しろ東京の鮭屋がこれでないも夜も明けない日も暮れないと言ふのですから、全く天下無敵です。』

と今度は又右衛門と共に無條件だつた。

『姐さん、お茶を一抔いたゞこ。餘り喋つて喉が乾いた。熱いのをいたゞこ。』
と少時してから松本さんが言つた。

『いたゞこは一寸變つてゐますね。當地の方言ですか。』
とお父さんが訊ねた。

『さうです。略して「だあこ」とも言ひます。』その煙草取つてだあこ」とやります。伊勢の「お母やん」伊賀の「いたゞこ」といつて有名なものです。』
と松本さんはお國訛まで有名にして丁ふ。

朝は池に飼つてある白鳥の鳴き聲で目が覺めた。松本さんの指金か、女中はニヤ／＼笑ひながら茶粥のお給仕をした。間もなくその松本さんも見えて、僕達はがた／＼汽車に乗り込む。それから本線でわかれる時、

『昨日休むでゐないと今日は何うにか都合をつけて奈良までお供をするのですがね。』

と銀行員は如何にも残り惜さうだつた。

『まあ／＼、紳士の資格を得るまでは辛抱して勉強することだね。』

と三輪さんは先生らしい訓諭をした。

『何うも種々有難うムいました。お蔭で上野は頗る材料豊富になりました。』

とお父さんは眞正に何か書く積りのやうなことを言つて謝意を表した。

『東京で鮫を喰べるときには必ずあなたのことを思ひ出しますよ。何卒御健在で。』

と團さんもお禮を述べ、それに和して田鶴子さんと僕が幾度もお辭儀をした。

緩やかな溪流傳ひの笠置邊は何となく長閑で春の旅といふ感を深からしめた。ところ／＼にママモスのやうな巨岩が寢そべつてゐるためかその間に浮んでゐる川舟や男女の人達が馬鹿に小さく見える。皆遊山の客らしく、中には僕達の汽車を目がけて喝采を揚げるくらゐ酔つてゐるのもあつた。

『鮫の捕れさうなところだね。』
とお父さんが言つた。

鮎の話は先刻から二人連れに乗客が始めてゐた。

『この邊の鮎は昔の座頭と同じやうに京へ上りますが、品の好い丈けに弱い魚ですから、生かして持つて行くのに大骨を折ります。彼れでは値も高い道理ですよ。』
と甲が言つた。

『は、あ、私は乾からびたのしか見たことがありませんが、彼れでも元來は生きてゐるものですかね?』

と乙は剝軽な受け答へをした。斯ういふときには得て話のはづむものだ。

『去年の夏伊勢へ商用で参りましたが、歸途に阿漕から桶を擔いだ男が乗りました。客車の入口のところ立つたまゝ、絶えず天秤棒を揺つてゐる様子が如何にも氣狂染みてゐましたから念のために訊いて見ますと、鮎だと言ふのです。』

『動悸つとしましたね? あんたは、鮎といふと目も鼻もない。』

『雲出川の鮎を京都へ持つて行くのださうでした。鮎といふ奴は家つきの娘ぐらゐる氣むづかしいものです。桶の水が川の瀬ほどに動かないと承知しません。それも死ぬの生きるのと言はずに突如上

つて了ふからたまりません。そこでその男は笠置に待つてゐる相棒に渡すまで荷を揺り通しです。

笠置から新手がまた京都まで揺つて行きます。昔なら早駕籠といふところですか。阿漕からも参りますが、笠置から主だと

言つてゐました。』
『然麼にして京都まで行つたら

嚙高いものにつきませうなり。』
『二十錢の鮎が京都に着くと一

圓五十錢になるさうです。全くそれぐらゐる取らなければ引き合

ひますまいて。』*
『何程儲かるにしても唯成金共の用足しを勤めるだけのことだ決して正業ぢやありませんな。』



『然麼ものを食つたら口が曲りますぜ。』

『一桶二十五尾で一荷五十尾一日五荷は運べると言つてゐましたよ。五荷といふと五々二百五十尾、大變な儲けですな。しかし二人がかりだし、死ぬのも餘程あるだらうし、汽車賃も往復五回で……』

と甲は頻りに指を折つて首を傾けた。

と乙は餘り感心しなかつた。

『私もその折さう思ひましたよ。二時間も三時間も立ち續けて彼の重い桶を拵つてゐるのは大抵の仕事ぢやありません。これが病人に薬を持つて行くともいふのなら兎に角、全く金持の口腹の慾を満たすためだと考へたら私も何だか不愉快な心持になりました。那樣いふ風に徒勞に骨を折る商賣が多いから社會は案外進歩しないのですな。』

と甲が慨嘆すると、乙は、

『御説の通りです。日本人は少くとも三分の一は大骨を折つて徒勞をしてゐます。』

と立ち上つて僕達の方へ歩み寄つた。多分お父さんの反省を促すのだらうと思つたら、煙草の吹殻を棄てに來たのだつた。

『しかし此處の鮎は實際好いですよ。此邊では何といつてもこの木津川と吉野川ですな。吉野川では一尺からの釣れます。』

と甲は又鮎の問題に立ち歸つた。

『然麼大きなのがありますかな？』

『ありますとも、去年私は一尺からのを四五十尾釣りました。』

『あなたは太漁のお話はよくなさるが、現物を私のところへ御覽に入れたことは根つからありませんな。』

『何うも恐れ入ります。今度は必ず御覽に入れませう。』

『否、冗談ですよ。』

と乙は制するやうに言つて、

『一體餌は何ですか？』

『鮎の餌をお訊ねになるやうでは心細いですな。鮎は蚊鉤といふので釣ります。毛で拵へた蚊の形の中に鉤が仕込むであります。』

『成程、二重の詐欺ですな。』

『さうです。しかし普通の詐欺では先様が承知しないから仕方ありません。蚊鉤の数が三百種からあるほど鮎は氣むづかしいものです。』

『三百種？一々形でも違ふのですか？』

『形は大同小異ですが、毛の色合が一つく違ひます。此の三百餘種類から天氣の模様や水流の具合に鑑みて一番鮎の御機嫌に叶ひさうなのを撰り當てるか否か、上手と下手の分れるところですよ。鉤が合へばパクリときます。するとピリ／＼ツといふ震動が糸から竿に傳つて脳天まで達します。是が好い心持です。電気治療以上ですな。レウマチスなんか即座に癒つて了ひます。他の魚では迎も斯う骨身に泌み渡るほどの手答はありません。』

『それは魚のかゝつたときは嬉しいものです。私も子供の頃釣堀の緋鯉を引つかけたことがありますが、胸がドキ／＼しましたよ。』

『釣堀と一緒にされちや張合がありませんな。ところで鉤が合へば面白いやうに釣れますが、合はないときた日にはこれくらゐ悲惨なことはありません。隣の人が矢繼早に釣り上げるのに此方は鹽の中へ糸を下してゐると同様です。さういふ時には「あなたは什麼鉤を使つてゐらつしやいますか？」と訊いて見ます。しかし鮎釣りは皆商賣敵で意地の悪いものです。「赤いやうなのでやつてゐます」と答へますが、嘘を言つてゐる證據には赤いやうなのに變へても矢つ張り釣れません。そこで此方は偶然したやうにして實は態と先方の糸へ引つ絡めてやります。さうして「これは失禮」

と手早く手繰り寄せて釣の色を見届け了ひます。』

『ナカ／＼人が悪いですな。』

『否、此方が釣れるときは先方も定つてさうしますからお互つこですよ。鮎釣りぐらゐ排外思想の旺盛なものはありませんな。他が何程釣つても決して褒めないこと不思議です。』彼の人の鉤は妙に能く合ふ鉤だ」とか「彼の人の場合は好いんで」とか言つて、道具や場所の所爲にして了ひます。皆天狗なのですな。釣れなかつた日のことは棚へ上げて、吉野川で一尺からのを四十釣つたの五十釣つたのと時稀の成功だけを吹聴してゐます。』

『吉野川は唯今承りましたよ。』

『いや、これは大失策でした。ハツハ、ハ、ハ、』

『ハツハ、ハ、ハ、』

と長い顔にも短い顔にも春の光が隈なく照つてゐる。

程なく奈良に着いた。田鶴子さんのお友達の清瀬さんがプラットホームに出迎へて来てくれた。田鶴子さんと僕は夕刻ホテルで皆に落ち合ふまでに清瀬さんのお引き廻しに委せることになつた。

大人連中は差當り子供の壓迫を免れて自由行動を執るに異存もなく、僕達も久しぶりで若いもの同志の世界に戻るのを嬉しく思つた。

清瀬さんはお父さんの轉任と共に東京から當地の女學校へ轉じ、田鶴子さん同様つい先月卒業したのらしい。何方も現代婦人の雛つ子だけに表情頗る逞く、殆ど相擁して、

『私、随分吃驚したわ。眞正に丈がお高くなつてね、あなた。』

『あなたこそ。見違へるくらゐですわ。でも二年足掛け三年目ですからね。無理もないわ。彼の頃同年でしたから今でも矢つ張り同年なんでせうねえ？』

『面白い清瀬さんねえ。然麼ことを仰有るところは些つとも變つてゐないわ。けれどもいつかお別れするときは此處でお目にかゝれるとは思ひませんでしたわね。』

『だから矢つ張り長生はするものでせう？ 私眞正に這麼嬉しいことないわ！』

『私も。この胸が一掴で何からお話して宜いか分らないの。』

といふ風で、僕は寧ろお父さん達と一緒に رفتつた方がお邪魔にならなくて宜かつたらうと思ふくらゐだつた。しかし續いて、

『謙さん、それではソロソロ御案内して戴きませうかね？』

と僕も漸く田鶴子さんの認めるところとなつて停車場前の大通りを辿り始めた。

『これが皆見物客よ。天氣さへ好ければ毎日この通りです。田舎もなか／＼馬鹿にならないでせう？』

と清瀬さんは僕達の前の團體を指さした。兩側から宿引が大聲を揚げて頻に招いてゐる。と見ると蝙蝠傘を擔いだお爺さんと信玄袋を提けたお婆さんが往來の眞中で立ち止まつた。左右からの引力が全く均等の場合には前進は當然遮られる。宿引は得たり賢しと小腰を屈めながら、

『もしくくくくくく……。』

とばかり息もつかずに兩方から招き寄つた。その眞剣なこと、

『何うしたんでせう？』

と田鶴子さんが怪しむぐらゐだつた。

『宿引の競争よ。何方が勝つてせうね？』

と清瀬さんも興味を催した。

『もし〜〜〜』

とその間も血相を變へた競争者はジリ〜と獲物に迫つた。鶏を鳥屋へ追ひ込むときの手加減で雙方から等分に詰めかけないと、大切のところでもパツト舞ひ立つて了ふのらしい。老夫婦は顔を見合せて少時宙に迷つた末、右の方の宿引が一寸息をつき左の方が一段聲を高めた刹那、忽ちそれに荷物を渡した。僅かの氣合で勝負がつくものと見える。それにしても負けた方があれだけの努力にさう執着も置かず極めて事務的に引き退つたのには僕も感心した。

『開化天皇の御陵で△います。人皇九代にわたらせられます。と間もなく清瀬さんが左手を指さして言つた。さうして、

『奈良の案内は此處から始めるのよ。遊覽地ですから毎月のやうにお客さまが見えます。その都度御案内を言ひつかるもんですからもう悉皆覚えて了つたの。』



猿澤の池へ来たときも衣掛け柳の下で、

『采女はこの柳に着物を掛けて身を投げました。面當てですわね。』

『采女つて何人？』

と田鶴子さんが訊くと、

『昔の美人よ。君寵が薄らいだので世を果敢なむだのですつて。』

『まあ、可愛さうに！ 愛情問題の犠牲ですね？』

『さうよ。それに身分が高い上に評判の美人でしたから、今なら好い新聞記事ですわ。きつと器量を鼻にかけた我儘な女でしたらうよ。その證據には後から彼のお宮に祀つたのですが、池を見るのが厭だといつて勝手にぐるりと向きを變へて了つたのですつて。』

と清瀬さんが説明した。成程采女の社といふのは鳥居だけが池に面して御本尊はツンと外方を向いてゐる。

奈良には鹿がゐると聞いて来たが、實に澤山ゐる。最初は珍らしくて鹿煎餅を振舞つてやつたけれど、斯う到るところで鉢合せをしては應接に違がない。

『あなた方は鹿に紅葉の來歴を御存知？』

と清瀬さんが花の松のところで訊いた。

『否。』

と田鶴子さんが僕の分まで答へてくれた。

『それなら石ころづめの遺跡を見て参りませう。』

と清瀬さんは僕達を十三鐘へ案内して行つた。さうして、

『昔、十三になる興福寺のお小僧さんが春日様の鹿を殺して、鹿の死骸と一緒に此處で石ころづめにされたのですとさ。』

『石ころづめつて何うするのです？』

と僕が尋ねた。

『穴へ入れて石で詰めるのです。けれども是は嘘よ。その證據にはこのお堂が十三鐘でせう。子供が十三でせう。それから石ころづめの穴の深さが一丈三尺といふのですもの。さう十三といふ數ばかり揃ふ理由はないわ。』

『けれども十三といふ不吉な數ばかり揃へて動物愛護の精神を表した傳説と見れば宜いでせう？』

と田鶴子さんが註解を試みた。

『人間虐待の精神も表れてゐますね。』

と僕は不服を唱へた。

『真正にさうですよ。兎に角その小僧さんのお母さんが手向けのために此處へ紅葉を植たのが鹿に紅葉の起原だといふのですから益々心細いわ。』

と傳説を出來合のまゝで受け容れないところは田鶴子さんよりも清瀬さんの方が團さんに似てゐる。

春日様は一の鳥居から二の鳥居まで随分長道だつた。此間も其處此處で鹿に行き會ふものだから、田鶴子さんは記念のためにと言つて、まさか今しがたの竹篋返しでもあるまいが、清瀬さんと僕と數頭の鹿を一視同仁にキヤメラにをさめた。折から見物客を乗せて來た俵が立ち止まつて、『鹿は悉皆で三千からをります。夕方の五時にこの邊でラツバを吹いて呼び集め、「お定り」といつて豆腐だの菜葉の切れ端だの餡粕だのを喰べさせます。』

と説明を始めた。

「毎年十月半ばの土曜から日曜へかけて鹿の角きり祭りがムいます。是が又珍らしい見物で、大變な人出が致します。切りました角は一週間の角祭りを済ました後春日様の出入商人へ拂ひ下られ、お土産の角細工になつて皆様の御調法を致します。御承知でもムいませうが、鹿は至つてお産の軽いものでありまして、産氣がつかますと此邊の路傍に寝轉んで生み落します。さうして物の一時間と経たない中にもう親も子もノコノコ歩いて行つて了ひます。産婆も何も要つたものでムいません。なほ人間と一つも變らず母の胎内に十月居りますところから鹿の角は安産のお守りとして珍重されます。それでこの地方では女の子にお鹿といふ名をよくつけますし、又臨月になりますと髪飾りを委皆鹿の角細工のものに更へる習慣がムいます。」

伸屋さんの安産論が身に沁みたのか、春日様の境内にあつた寄り木神社といふのが特に僕の注目を惹いた。柞、藤、椿、南天、陸英、櫻、楓の七種が一本になつて覺束なく生えてゐる。石婦石郎もこの木の枝に紙摺を結びつけて祈願すれば子寶を授かるとある。尤も片手で結ばないと御利益がないうさうだから多少難行に屬する。しかもこのお呪禁を根氣好く果してなほ配達の間違のないやうに

番地入りの名刺を添へた入念の向きくが、尠からず認められた。かういふ連中は序に鹿の角細工を買つて行くほど氣が早い相違ない。兎に角奈良は調法だと思つた。一箇所で悉皆用が足りて了ふところはデパートメント・ストアを聯想される。

ところづくに伊勢の内宮さんのに劣らない杉の大木が生えてゐる。春日杉といつてこの山のは特に名材ださうだ。現に先年倒れたのは大阪の商人が四萬六千五百十二圓に入札したと先刻から僕達の前になつたり後になつたりしてゐる連中が話し合つてゐた。材木としての價値は兎に角立木として實に崇高なものだ。三輪さんは大木崇拝家だから伊勢では大喜びをして、「忝なさに涙こぼるゝ」といふのはこの千古の神杉から受ける催眠術的暗示だらうとさへ解釋した。這麼ことを思ひ出しながら手向山八幡へ辿りつくと、何があるのか人群りがしてゐた。

「喧嘩だ〜！」

と僕達の前の連中が駆け出した。成程、喧嘩も喧嘩、朱塗りの社殿を背景に一人の武士と二人の娘が斬合をして、なほ助太刀が二人抜刀で控へてゐた。

「活動の實寫ですよ。」

と清瀬さんが僕達に安心させてくれた。

武士はナカ／＼強かつたが、助太刀が手出しを始めたので受け身になり、間もなく、妹嬢に一刀浴せられて倒れると、姉嬢が走り寄つて止めを刺した。「親の仇、思ひ知れや！」とでも言ふのだらうが、口を動かす丈けで聞きとれなかつた。臺詞は寫らないから言ふ必要がない。寫真だから見えるところ丈けで足りる。この邊がカラーさへあればシャツは要らないといふ現代思潮に投合するので活動寫真は爾／＼歓迎されるのだらうと思つた。

第九回

聊か疲れて清瀬さんの家へ着いたのは三時近くだつた。

『お二人とも嘸お腹がお空きで△いませうね。這處に刻限も考へずにお引き廻しをして。』

と待ちあぐむでゐたお母さんは清瀬さんに小言を仰有つて、すぐにお晝の支度にしてあるお茶の間へ案内してくれた。距離からいふと伊賀の上野の茶粥以來大和の奈良まで一口も喰べないのだから

實際空腹だつたが、お蔭であれから二月堂三月堂大佛と目ほしいところは大抵見て了つて、土地のお話を聞く下拵へが悉皆できてゐた。

御飯が濟むと間もなく清瀬さんのお父さんがお役所からお歸りになつて、

『どうです？ 公園でも御見物になりましたか？』

と仰有つた。

『公園どころぢやありませんよ。十一時から今しがたまで常子が立て續けに御案内申上げたのですつて。』

とお母さんが笑ひながら答へた。

『それは／＼。お草臥れでせう。常子は性急だからね。大抵のお客さまは辟易するよ。』

とお父さんも笑ひ出した。

常子さんは一人娘だ。萬事獨占で我儘が利いてよからうと思ふが、喧嘩相手がないと淋しくていけないさうだ。田鶴子さんにも僕にも下が大勢あると聞いて、

『眞正に結構で△いますね。お姉さんお兄さんだけにどことなくキチンとしてゐらつしやる。』

とお母さんが羨ましがった。

『私だつて他所さんへあがれば一時間や二時間はキッチンとしてゐますわ。』

と清瀬さんは黙つてゐなかつた。

『此通りですからね。一人娘は親の見境がありません。』

とお父さんが譁つた。

『宅では代々一人ださうです。遺傳でせうかね?』

とお母さんが訊いた。

『悪い事はどこでも皆遺傳へもつてゆく。隣家の吉田さんでも遺傳の所爲にしてゐるよ。』

とお父さんがいつた。

『でもお隣では一人もいないぢやありませんか。一人もないのが遺傳なら御本人達の生れてくる筈がないわ。』

と常子さんが揚げ足を取ると、

『それさ。それが可笑しいのさ。』



と折に觸れて愚痴になつた。

とお父さんは笑ひ出した。一人娘は僕達のやうな十把一からけの數ものとは違ふやうだ。一寸這塵

ことをいつてもお父さんに笑つて貰へる。一人だから餘計に存在を認められるのか、家庭の一員として充分の權利と尊敬を享有してゐるのらしく、却つて此方が羨ましかつた。

談話は當然の順序でお互の身の上から奈良のことに移つた。常子さんのお父さんはお役人で始終縣下へ出張するから、この地方のことに頗る明るい。駒場出だといつたから、産業の方の技師だらうと推測してゐた通り、

『地方はどこも大抵さうですが、こゝは殊に舊弊のやうですよ。何でも昔の通りでないと承知しません。それですから田舎へ行くと百姓が私達を洋服を着て靴を穿いた浮塵子だといつて唯々厄介者扱ひにします。』

正妻

『浮塵子つて何のことですか？』

と僕は少しでもお父さんの参考になりさうなことは覚えておかうと思つて訊いてみた。

『成程、東京からでは浮塵子から説明を要しますね？ 浮塵子といふのは稻につく害虫ですよ。私達が農作について種々と六ヶ敷い註文をするものですから、百姓が煩さがつて悪口をいふのです。』

『すると農學士は皆浮塵子ですわね？』

と田鶴子さんがいつた。

『まあさうですな——百姓にはせますとね。さうして怒じの學問が崇つて實際浮塵子同様の成績を擧げることもあるのですよ。百姓百姓つて決して馬鹿になりません。現にこの頃頻に宣傳してゐる内米の消費節約ですね。あれをこの地方の百姓は疾うの昔から實行してゐます。舊弊どころかこの點は餘程時勢に先じてゐるといつても差支ありません。』

『この邊では皆お粥を喰べるのですよ。』
と常子さんが説明してくれた。

『茶粥でせう？』

と田鶴子さんが昨夜仕込むだけの知識を披露した。

『さうです。茶粥も……。』

『豆茶粥で△いませう？』

『よく御存知ですか？』

と眼鏡をかけた浮塵子は稍驚いて、

『その豆茶粥の稀薄なのをこの百姓は日に四度も五度も啜ります。尤も過ぎたるはなほ及ばざるが如しで、内米の消費節約を代々組織的にやつてゐる結果、奈良縣は一般に壯丁の體格が悪いといふ評判です。どうもこの人は妙に遠慮深くて困りますよ。自分で汗水流して作つた米ですもの、栄養に要るだけはキナ／＼思はずに喰べるがよいです。かう人間よりも米俵を大切にする地方ですから、浮塵子も一つ方針を變へて、寧ろ内米の浪費宣傳をする必要がありますよ。』

その中に常子さんは突然問題を千百餘年の昔に戻して、

『田鶴子さん、今の奈良市を其頃の都と思つてゐらつしやると大間違よ。私、講義をして差上げますわ。昔の奈良は今の停車場の彼方から郡山の一角へかゝつてゐて、京都に劣らないくらゐの大都』

會で△いましたのよ。」

と地圖を擴げて説明を始めた。

『常子は何時も見てるたやうにいふね。』

とお父さんがニコ／＼した。

『見てみましたとも。其頃この邊は全くの田圃續きで、春先になりますと都の人達が先刻御案内申上げた嫩草山の摘草や興福寺東大寺への参詣がてら三々五々郊外散歩にきたものですわ。さうして都が京へ遷つて跡が畑になつて了つてもこの邊のお寺だけはその儘残つてゐましたから、日曜から土曜へかけて……あら、間違つた……土曜から日曜へかけて京から役人や會社員が息抜きに来る、大阪神戸邊から女學校の修學旅行も來るといふ有様でした。』

『常子さん、時代錯誤はいけませんよ。』

と田鶴子さんが故障を申入れた。新婦人の雛つ子は時々這麼六ヶ敷い口の利き方をする。しかし清瀬さんは頓着なく、

『そこで遷都と共に勞働のなくなつた里人達はその頃のことですから失業問題を起すでもなく、こ

の見物客を目的に興福寺や東大寺の周圍に巢をくひましたが、是が追々發達して今日の奈良市になつたので△います。かういふ風に先祖父々觀光客のお賽錢の零れを目的にして生計を立てゝるますから、奈良の人は夫は／＼消極的ですわ。多少企業心のあるのは遷都の折に皆京へついていつて了つたのですもの。今でも何かしようと思ふ積極的の人は晩蒔ながら京阪へ出て行きますから、自然春日様の棟木で奈良人形を刻むたりする躰のやうなのばかりが居残るのだと申します。よくて？

これは皆先生の請賣よ。

と手品の種明しにまで及んだ。

『ひどいことを教へる先生ね。土地の方ではないのでせう。』

とお母さんが驚いた。

『宮崎縣とか仰有つてゐましたよ。』

『宮崎あたりから來ると、こゝは物價が高いからね、日向の炭焼先生土地に反感をもつてゐるのだらう。』

とお父さんが同情した。すべて官吏教員の如き水草を追つて生活する階級には物價の高低によつて

その土地の人氣に善惡の判定を與へる復讐的の傾向がある。

『田鶴子さんはお茶をお習ひでムいますか？』

とお母さんは一寸談話の途切れた間に尋ねた。

『はい……學校で……眞の少しばかり。』

と田鶴子さんはチビく、繼ぎ足しながら答へたところを見ると手前を御覽に入れられるのを恐れたらしい。お茶のお稽古初めは人の顔を見ると無暗に立て、飲ませるものだから、僕も然慮こ
とにならなければいゝがと思つてゐるが、

『奈良は常子の悪口通り引つ込み思案が勝つてゐる活動的でない所爲か、茶の湯がこゝで源を發しました。利久の先生が紹鷗、紹鷗の先生が珠光、その珠光が當地で茶道を開いたのでムいます。こゝのお坊さんでしにが、後に義政公に召されて京へ上りました。さうして銀閣寺で例の茶法道を立てたのださうでムいます。』

と來たので、判らないながらも安心した。

『例のつて、俺は知らないよ。口さへあれば飲めるのに藥袋もないものを發明する坊主さね。』

とお父さんも僕と同感だつた。

『その通りですもの。あなたのやうな人には茶の湯の趣味は逆も分りませんわ。お茶といへばビール
のやうに唯飲むだけのものと思つてゐらつしやるのですからね。田鶴子さんや坊つちやんに笑は
れますよ。昔から佛道歌道茶道は三道一味、三味一道と申しまして……』

『三位一體説か。降参々々。』

『田鶴子さん、もう一日延ばせなくて？ まだ櫻井畝傍吉野と御覽になるところが澤山ありますの
よ。折角お出になつてこゝだけちや惜しいわ。』

と常子さんは勧誘を始めた。

『それからもつと奥へ入つて十津川までお出になると山又山で一寸別世界の觀がありますよ。何し
る醫者が草鞋穿きで病家廻りをするところですからね。山林の好いのがありますぜ。玉置山の杉と
きたら春日杉以上です。大和や紀州は山林を見ないと眞正の風俗人情が分りません。山林即ち財産
ですから、金持といはずに山持といひます。さうして山を矢張り紙幣か銀貨と心得てゐる證據には
一枚二枚と枚數で勘定しますよ。』器量が好いばかりに一枚無しの家から伐り木のある山の七十枚も

あるところへ嫁にいつた」なぞといつてゐます。伐り木といふのは伐り出せる立木のことです。」
と浮塵子は動もすると話題を自分の畑へもつていつて了ふ。

『奈良へいつたら南君を擔いでやらう。』

とはお父さんと三輪さんが豫ねて相談してゐたところだつた。十七八年全く會はないのだから不意打ちを食はせたら嘸驚くだらうと頻りに肝膽を砕いてゐたが、今朝京都へ立つ前に愈々*

『十一時までに屹度停車場へお届け致しますから。』



* その神算鬼謀を實行することになつた。團さんは南さんとは面識のない所爲か、

『僕は雲助や六尺の子孫でないから人を擔ぐお手傳ひは御免蒙る。博物館でも見て停車場で落ち合ふこと、しやう。』

と何時になく君子然と構へてゐた。田鶴子さんは昨夜からの約束でもう清瀬さんが迎へにきて、

と引つ攫ふやうに連れていつて了つた。かういふ次第で僕達三人はホテルを出るとすぐに團さんと別れた。

昨日とは方面が違ふ。これで奈良の兩側が見られると思つてゐると、俥はところぐに崩れかゝつた土塀のある場末町へ差しかゝつた。

『この土塀は随分古いやうだが、昔のが残つてゐるのかね?』
とお父さんが訊いた。

『はい。昔の築塀でございます。これで千年からたつてゐます。』
と俥屋さんが教へてくれた。さうして、

『南さんと仰有いましたな?』

『さう。南といふ醫者だ。高畑としてあるからこの邊だらうね?』

『お醫者の南さんならこの外れです。』

と僕の俥屋が知つてゐた。間もなく、

『成程、南醫院とある。こゝだ。案外大きいね。』

とお父さんが言ふと、三輪さんは看板を見詰めて、

『内科婦人科小兒科か。何でもやるんだね。』

『目ほしい科は皆書いておくんだよ。何か引つかゝるからね。』

僕達は早速玄關へ上り込む。患者は一人もきてゐなかつた。

『御診察を願ひたいので。』

と三輪さんは出てきた書生に申入れた。

『少時お待ちを。』

といつて青年が引つ込む後、

『先生餘り流行らないやうだね。』

とお父さんが小さな聲でいつた。

『しかし履物が大分あるから診察中なんだらう。』

と三輪さんは伸び上つて土間を見渡した。

『履物つて、下駄は今の書生つほうなので、彼の靴は皆僕達のだけ。』

とお父さんも土間を覗くやうにして相手の誤謬を指摘した。

『成程、さうだね。或はまだ時刻が早過ぎるからかも知れない。』

と三輪さんは時計を出して見た。捲き忘れたから例によつて止まつてゐる。「一週聞捲きの細君に買つて貰ひ給へ」とは先日團さんから受けた説諭だつた。兎に角今晩は自分の靴をもう他のものと思つてゐる放心者が、深く敵地に入つて御大將を擔がうといふのだから少し押しが太い。

お父さんと三輪さんは硝子障子の隙間から診察室を覗き始めた。

『ゐないね。』

『まだ寝てゐるのか知らず。』

『門前雀羅さ。』

『爆弾をおいても危険はない。』

患者がゐないにしては馬鹿に待たせる。何のことはない。三輪さんとお父さんは東京から奈良の高畑くんだけまで空しく醫者の玄關に坐りにきてゐるのだと僕が齒痒く思つた頃、先刻の書生が再び姿を現はした。

『どうぞ此方へ。』

といふ案内につれて三輪さんは診察室へ入つていつた。必ず障子を締め残す人だけにこの際は隙見をするに調法だつた。代診らしいのがペンを手にして型の如く姓名宿所から容態を尋ね始めた。

ところへ御大將が悠然として出てきた。三輪さんやお父さんと同年輩だといふのに頭のツルリと禿けた老成人だつた。三輪さんも案外だつたのか、すぐに名乗りを揚げてアツといはせる仕組は忘れて了ひ、その儘従順に脈をとらせた。

『是はいけない。親爺さんだ。謙一や、門に標札が二枚出てるたかい？』
とお父さんが僕に囁いた。

『否、一枚のやうでしたよ。一寸見て参りませう。』

と僕も確める必要を認めるほど好奇心を起して窺つと門まで行つて來た。

再び診察室を覗くと三輪さんは吊し籠のやうになつて白シャツを脱いでゐた。上り込むで了つては今更人違ひだともいへず、乗りかけた船と度胸を据ゑて、序に悉皆診て貰ふ氣になつたのらしい。老先生は患者の胸部と背部に少時の間聴診器を當てた末、

『どこにも異常はありません。全く健全です。』
と判定を下した。

『若い頃から神経衰弱があるのですが……。』

と三輪さんは不服らしかつた。

『否、立派な健康體です。強ひて名をつければ假病ですな。これは學生時代からの痼疾だからもう快癒の見込はありません。』

と國手は喝破して、

『ヒッヒ、、、 どうだい？ 三輪君！』

『や、矢つ張り南か？』

とばかりアツといはせる筈の三輪さんは美事一杯食はされてシャツを着る方角もなかつた。

『十七年目にめぐり會ひ、裸體で御挨拶は相變らず粗忽かしいね。おい、村岡君、然處ところ覗いてゐないで入つて來給へよ。』

と圖星を指されて、お父さんも、

『や、悉皆反討を食つて了つた。しかし久しぶりだね。』
とノコノコと入つていつた。

僕達は來惠から珍客に榮進して客間へ通つた。主人公は、
『兎に角能く寄つてくれたよ。』

とこの氣紛れな訪問の形式に拘らず唯々大喜びだつた。

『君は年が寄つたね。』

とお父さんは南さんの頭をツクツクと打目成つた。

『大分きたよ。』

とお医者さんは頭を撫でた。

『顔は君だけれど頭がその通りだから、僕はお父さんが出てきたのだと思つて、どうも策の施しやうがなかつたのさ。かうして顔だけ見てゐるとさう老人でもないやうだね。』

とお父さんは今度は顔ばかり眺めた。
『馬鹿をいつちやいけな。君達とおつつかつた。君達だつて相應に老けてゐるぜ。』

『變つたね、實際、君は。青年で別れて再び顔を合はせると頭の毛がなくなつてゐるんだもの。』
と三輪さんも主人公の頭顱を久瀾の叙述に利用した。

『何も不思議はないよ。同窓の中にこの十七年間に死んだ奴さへ可なりあるぢやないか。頭の毛ぐらゐ無くなるさ。』
と南さんは毛髪を超越して、

『しかし忍びで入り込んできた君をまんまと裸體にしたのは聊かお手際だらう?』

と得意がつた。

『僕も必定君のお父さんと思つたものだから、今更厭ともいへず診察を受けたのさ。親子はかうも似るものかと感心してゐたが、似てゐる筈さ、當人だもの。』

『家まで来て主人公を見違へるところはどうしても、三輪式だね。』



『往來で會へば却つて分るよ。帽子を被つてゐるだらうからね。』

『兎に角今日は痛快だった。』

『しかし健康體は誤謬だよ。』

『否、神經衰弱は假病だよ。』

『しかし匿れてゐた僕まで知つてゐたところを見るとこれには確に有力な内通者があるんだね。』
とお父さんは疑ひ出した。

『實は君達が奇襲を謀むでゐるといふ密告が或筋から來た。それで手ぐすねひいて待つてゐたところさ。』

『何誰だらう?』

『それは天機洩らすべからずさ。』

『團君か知ら?』

『然麼人は知らないよ。』

それから談話は一別以來のことに移つて果しなく弾むだが、追々出發の時刻が迫るので、僕達は

お暇をしなければならなかつた。南さんは大變殘念がつて、

『君達は幾歳になつても子供だから困るよ。這麼くだらない狂言を書かすに前もつて知らせてくれれば案内のしやうもあつたのに。』

と恨むだ。

『實は昨日の晝過に來る積りでホテルから電話をかけたんだが、京都へ往診に出て歸宅は晚いといふもんだから、つかう出發間際になつたのさ。』

とお父さんは辯解した。

『京都へ都踊りを見にいつたのさ。尤も京都や大阪へは何の用でいつても病家へは往診と觸れ込む。繁榮策さ。』

『流行るかい?』

『流行らない。門前雀羅さ。爆彈を置いても危険はないよ。』

『おや、聞いてゐたのかい?』

『聞いてゐたとも。襖の蔭でね。』

『悉皆失策つて了つたね。木乃伊が木乃伊取になるといふ奴さ。』
と三輪さんがいふと、南さんは、

『木乃伊取が木乃伊になるんだよ。例によつて頓珍漢だね。道中氣をつけて自動車にでも轢かれな
いやうにし給へよ。』

と窘めて、

『ところで坊ちゃんに何かお土産を差上げたいのですが、あゝいふものはどうですか？』
と床の間においてあつた瓦を指さした。

『大極殿のかね？』

とお父さんが訊くと

『さうさ、真正の掘り出し物さ。』

と南さんは戸棚の中から夥多撰り出して来て、

『坊ちゃん、這麼断片ばかりですけれど、これでも東京へ持つて歸つてその道の人に見せると涎を
流しますよ。』お土産に瓦一は洒落てるでせう？ 舌切雀だ。重いですよ。』

折から俵屋からもう餘り時間がないといふ注進がきた。患者もどうやら二三人溜つたらしかつ
た。

『這麼厄介なものを真正に御迷惑でせうにね。』

と奥さんが瓦の断片を新聞紙に包んでくれる間も南さんは、

『京都まで案内ながらゆきたいんだが、生憎丁度今夜あたり危い患者が一人あるんでね。』

といかにも本意ないやうだつた。

『また會ふさ。東京へ診察にきたときには是非寄り給へ。』

とお父さんは一矢酬ひたが、緋緘の鎧には通らなかつた。

日程によると宇治を見物する筈だが、祕書役二人の不在中にどう模様が變つたのか、僕達は鶯地
に京都へと志した。

『都踊りを見れば伊勢音頭なんかどうでもいゝつて南君がいつてゐたね。』
とお父さんが妙に意氣込むでいふと、

『しかし然麼に方々を見物してからで間に合ふか知ら？ 後れて満員とでもくるとことだぜ。』
と三輪さんも魂はもう祇園の空へ飛んでゐる。

『大丈夫だよ。そのために宇治を犠牲にするぢやないか？ しかし然麼にしてまで見るほどのものぢやないぜ。』

と團さんは餘り期待してゐない。

宇治川へ差しかゝつた時、お父さんは、

『案外小さいね。昔の人は這麼ものを渡つて宇治川の先陣なんて威張つたんだね。』
と貶した。すると三輪さんも、

『平等だつたね？ 扇の芝は？ 「椎を拾ひて世を送るかな」なんて生きてゐる中から位一級を進めて貰ひたがるところは頼政も俗物だね。』
と悪口をいつた。見たいのに都合で素通りをしてしまふ名所は何とか難辯をつけて軽視しないと気が

濟まないのだらう。高綱も源三位も都踊りの飛沫を受けた。

京都に着くと自動車が待つてゐる——格屋へ乗りつける——支度のできてゐた晝食を認めてす

ぐ見物に出掛ける。かう少しの無駄もなく目まぐるしいほどグイ／＼と事の運ぶのは、皆柴さんの肝煎だつた。こゝは大都會だけに一同共通の友達が柴さんの外にもまだあるさうだ。

綺麗な川だとばかり思つてゐた鴨川は案外だつた。それに量も至つて少ない。

『けれども隅田川のやうなことはないわ。』

と田鶴子さんは懐しさうに伸び上つた。

『しかし富士の白雪には迎も較べものにならないでせう？』
と僕がいふと、

『でもこゝのは綺麗で有名ぢやないのよ。質が好いのよ。』

間もなく知恩院に着いた。本堂は見上げるほど大きなものだ。田舎から來たらしい善男善女の一團が口を開いて見上げてゐる。

『春先だからお上りさんが多いよ。』

と柴さんがいつた。

『狂人かい。』

と三輪さんは春先と聞いて早合點をした。尤も團長らしいのは日清戦争時代の軍服を着て勳章を二つ三つつけてゐた。

『地方から見物に来る人のことさ。東京なら田舎漢といつて馬鹿にするところだけれど、京都の人は打算的だから大切にす。お上りさんは大財源だからね。這麼風體をしてゐても中には本願寺へ五圓十圓のお賽錢を上げて行くのがあるさうだよ。』

と柴さんが説明した。

『何を見てゐるんだらうね？ まだ口を開いてゐるぜ。』

『左甚五郎の傘さ。そら「からかさはこの上にあり」と書いてあるだらう。此建築が出来上つた時左甚五郎が彼處へ傘を置き忘れて來たのさ。』

『何うして置き忘れたんだらう。』

と三輪さんは訊き始めると無暗に訊く。

『其處までは知らないよ。』

『餘り完全に出來たもんだから魔がささないやうに一寸瑕をつけたといふ傳説になつてゐる。』

と團さんは商賣柄御存知だつた。さうして、



『廊下は残らず鴛張りイ！』

『名工は矢張り人其ものとして豪いところがある。天工を凌駕しては濟まないと思つたんだね。人間の分を辨へてゐる。』

神は強し人は弱しといふことを自ら悟つてゐる。傘の由來の眞偽は兎に角、名人は皆眞正の人間さ。』

と何時になく眞面目なことを言ひ出した。

『然ういへばこの頃の建築で蝙蝠傘の置いてあるのは見受けられない。團君、彼は出來上るまでに結構狂つて了ふから態々瑕をつける世話もないんだらうね？』

とお父さんが癖を出した。

内に入つて、袴を穿いた案内者の手にかゝつた時、僕達は如何にもお上りさん氣分になつた。

とお爺さん滅法大きな聲だ。成程、廊下の板は踏む度にホウホケキヨ、ケキヨ〜、法華經と鳴く。淨土宗の本山としては聊か釣り合ひが悪いが、甚麼僻耳で聞いても確かに鶯の聲だ。

『ケキヨ〜』

『梅の間ア！ 狩野定信の筆ウ！』

『ケキヨ〜』

『松の間ア！ 狩野直信の筆ウ！』

『ケキヨ〜』

『鶴の間ア！ 狩野直信の筆ウ！』

『ケキヨ〜』

と案内人は何處のと同じことだが、早く片付けて了ふ積りか、決して仔細に檢分する餘裕を與へない。その中に庭の見えるところへ來ると一段聲を高めて、

『此山が華頂山！ 小堀遠州好みの庭ア！ 三代將軍手植の松ウ！ 姫小松です。』

『ケキヨ〜』

と何處まで行つても鶯張りだ。さうして間もなく、

『當山總坪數七萬三千四百四十二坪、當山總棟數百六軒、當山總疊枚數五千八百枚、鶯張廊下總間數三百間、ケキヨ〜』

とあつて僕達は一同放免になつた。

『鶯張は今の人が何程工夫しても出來ないといふが、建築家の意見は何うだね？ 矢張り埃及の

木伊乃見たいに埋滅した技術かしら？』

と長廊下を通りながら柴さんが尋ねた。

『然麼ことはない。日本は残念ながら埋滅技術の出るほど進歩してゐなかつた。縁側を張り損ふと丁度那聲音がする。それを鶯の聲と思ふのは思ふ方の勝手さ。』

と團さんは答へた。

『でも近頃直したところは鳴らないぜ。』

と柴さんは新しい板を踏むでみせた。成程、鳴らない。

『それは賣僧の巧み凡ならずさ。對照のために態々鳴らないところを拵へてお上りさんを有難がらせるのさ。』

とお父さんは人の悪い解釋をした。

圓山公園へ出て名高い絲櫻の咲きかけを見物し、又眞の少時自動車のお世話になつてから僕達は清水のグラ／＼坂を登り始めた。京都の名所は初対面でも皆古馴染のやうな氣がする。この清水の觀音様が妙に頭腦に泌み込むでゐると思つたら、

『謙さん、唱歌の一寸法師がお姫様と一緒に參詣したのは此處ね。』

と田鶴子さんがいつたので、成程と合點がいつた。

『清水の坂のほり行く日傘哉か。子規はやつぱり巧いところを覗つたよ。』

とお父さんも何かの聯想で悦に入つてゐた。

店並に清水焼を賣つてゐる。妹達の飯事道具になりさうなのが殊に目を惹く。

『三輪君、あの金の定紋入りの湯呑を買つて行かないか？』

と柴さんが笑ひながらいつた。

『買つて行かう。僕の紋のがあるかしら。』

と買ひもの好きの三輪さんは勧められるまでもなく左右を物色してゐた。

『ところが僕は此處へ着任の當座あの茶碗で失策つたんだよ。』

『何うして？』

『僕の紋がついてゐたから買つてきて使つてゐると或日友達が来て、君、是は佛様の茶碗だつてさ。』

『あれがかい？ さう聞かないと買ふところだつた。團君、あの虎はどうだらう？ 田口君が喜びさうだぜ。』

『いけない／＼、那麽大きな重いものは。』

と團さんは例によつて荷を恐れた。

登りつめて本堂に着くと、

『これが所謂清水の舞臺だよ。町が大略見えるだらう？』
と柴さんが紹介した。

『成程高い。一寸飛び下りる決心はつかないね。』
とお父さんが言った。

『これから桃山の血天井に大佛に三十三間堂か。大佛の鐘は坊ちやんもお嬢さんも御存知でせうが、國家安康で家康が因縁をつけた代物ですよ。京都にゐると始終かういふお相手を勤めるから案内の順序をすつかり覚えて了ふ。さあ、お上りさん、ソロ／＼でかけませう。』
と柴さんが促した。

三十三間堂では薄暗の中に金色燦爛として何列にも立ち並ぶでゐる千手観音の數に驚いた。
『随分ゐるね。しかし千頭は掛値だらう。』
と三輪さんが呟いた。

『千體だよ。馬ぢやあるまいし。』
と柴さんが訂正した。

『千手観音といつても手は然麼にないわ。』
と田鶴千さんが念の爲めに勘定して見たら四十二本あつた。

『たつた四十二本かい？ それでも生きてゐるのよいか餘程多い。』
と團さんがいつた。

『千體もその筆法ですよ。百や千といふ字は何處の國でも澤山といふ意味に使ひますからね。』
と柴さんは如何にも語學の先生らしい註釋をしてくれた。

『然麼法螺を吹かないで四十二手観音といつても、無い御利益に變りはないぢやないか。宗教や文學はどうも鯖を讀むから氣に入らない。』
へば生きた菩薩の方が有難い。』



『相變らずだね。兎に角參詣者はこの千體の觀音像の中で必ずどれか亡い親兄弟に似たのに會へるといふ傳説さ。迷信といふよりも一種悲痛な人間苦が脈を打つてゐる詩的空想だね。』
『その詩的空想といふ奴がこゝ氣に食はない。』
『どうも手がつけれられないね。それぢや氣に入る都踊りへ早く案内しやう。僕もどつちかとい

「さう願はうかね。團君の御機嫌が好くなるやうに。」

とお父さんは人に託けたが、三輪さんは、

「イヨ／＼都踊りだね。」

と勇み立つた。

丁度刻限だったので今度は何處へも寄らず一気に宿屋まで駆けつけた。家ではお湯は一日か二日置くのに旅行に出るから一晩も缺かしたことがない。無精なお父さんは、時には入らないで了ふ癖に、

「謙一、お湯に入つておいで。」

と僕には命令的にくる。毎日のことなので僕は風呂場の凝り方によつて宿屋の格式を判定するやうになつた。柵屋のは大理石に色硝子づくめの素晴らしいものだ。

「京都はどうだね、住み心地は？」

と御飯を喰べながらお父さんが訊いた。

「落ちついてゐて好いさうだよ。」

と柴さんが答へた。

「好いさうだなんて他人ごとのやうだね。君はどうだい？」

「僕は東京で生れて東京で育つたんだから、東京以外の生活は生活の模倣のやうな気がしてちつとも身に沁みないね。」

「極端なことを言ふぜ、朝鮮滿洲とでもいふなら兎に角内地なら何處でも同じことぢやないか。」

「同じことさ——東京以外ならね。」

「それ程までに思ふなら早く東京へ歸つて來ることだね。」

「もう間もなく歸るよ。さうして教員は足を洗ふ。」

「何だ／＼？ 不平かい？」

と團さんは盃を置いて乗り出した。

「不平も大いに手傳つてゐる。しかし個人としての不平でなくて階級としての不平だ。」

「同情するよ。僕も行政官と技術官の待遇に兎角甲乙のあるのが不平でね、到頭官を辭したんだよ。恩給に漕ぎつけるのを待つてゐる局長と大喧嘩をしてやつた。おれだつて法科をやつてゐる

「ばとうに局長きやうちょうになつてゐらあ。大きな面つらをするねえ」つてね。」

「僕はとても恩給おんきふまで待つてゐられない。」

「一體いったいどうしたんだい？ 高等學校かうとうがくかうの教員けいゐんは待遇たいぐうが好いいつていふぢやないか？」

「まあ、後あとからゆつくり話はなさう。」

と柴しばさんは食事中しょくじちゆう不平談ふへいだんでもなからうと思つたらしい。

「店並みせなみは東京とうきやうと異からないが、住宅ちゆうたくが妙めうだね。入口いりぐちが馬鹿ばかに小ちひさい。君きみの家うちも那麽なんな鈴蟲すずむし籠かごのやうな細ほそい格子かうし構がまへかい？」

とお父とうさんは依然いぜん京都きやうとの住すみ心地こころちを氣きにしてゐた。

「此處ここは皆みなあれだよ。戸との潜ひそりや格子かうしの目めが大おほきいと金かねが逃にけて行いくといつて無暗むあんに小ちひさくする。」と柴しばさんが言いつた時とき。

「あら、然麼なんなことあらしまへんで。格子かうしが大おほけえとお日ひ様さまが澤山たん入はいつて疊たたみがえら早くはやいたむからどす。」

と給仕きよじの女中ぢやうちゆうが説明せつめいしてくれた。

「どつちにしても消極せうきよく的てきだね。さうして衛生えいせい上好じやうくないだらう？」

「衛生えいせいよりも疊たたみの方が大だい切せきさ。日光にっこうの入はいらないところへは醫者いしやが入はいるといふ通とほり、京都きやうとは肺病はいびやうが多おほいよ。」

食後しょくご團だんさんは、

「さあ、柴君しばくんの不平ふへいを承うけらう。」

と不平ふへいを専もつらの話わだい題だいにした。柴しばさんの主張しゆちやうは要えいするに教員けいゐん全體ぜんたいが政府せいふの詐欺さぎにかゝつてゐるといふことだつた。

「君きみ、技師ぎしには一級俸いっけいほうの人ひとがあるだらう？」

と柴しばさんが訊きいた。

「あるとも、僕ぼくの同輩どうはいは最早もうちう大抵たいてい一級いっけいになつてゐる。」

と團だんさんが答こたへた。
「ところが高等學校かうとうがくかうには一高いっかうから八高はつかうまたこの頃ころでできた摸倣まがひのを通つうじて一級俸いっけいほうは一人ひとりもゐない。俸ほう級表けいへうにはあるけれど事實じじつは絶無ぜつむだよ。」

『酷いね、それは！ 羊頭狗内だね。』

『死んで一級になつた人が神武天皇以來たつた一人あるばかりさ。事實三級が特別の異例で四級が行き止りだ。』

『一級俸は正一位だね。生きてゐる中には貰へない。』

と三輪さんがいつた。

『見せる丈けでくれない。福引の籤筒か。』

とお父さんがいつた。

『福引の籤筒はくれるぜ。去年の暮に僕のところの女中が引いてきた。して見ると高等學校の教員は丹波の笹山出身の女中よりも馬鹿にされてゐるんだね。』

と柴さんは憤慨した。

『君は今何級だい？』

と團さんが訊いた。

『この間漸く五級になつたと思つたら、見給へ、この通り白髪がボツ／＼生えてきた。』

と柴さんは頭を指さして、

『僕は念のために専門學校の方を調べて見たが一級俸はやはり絶無だ。尤も校長はベテ南省の俸先丈けにどこでも無爲にして一級俸を貪つてゐる。』

『ナカ／＼辛辣だね。』

『それから中學小學の教員にも機會の許す限り會つて實状を探つたが、此連中は妙に諦めが好い。一級俸は理想で到底現實世界の問題でないと觀念してゐる。ベテンにかゝつてゐながら少しも氣がつかないから可哀さうなもんだよ。』

『益々手厳しいな。』

『正にベテンだね。國家的大ベテンだ。』

『僕は東京へ歸つて新聞社へ入る。さうしてこのベテンを天下に訴へる積りだ。生きた一級俸が續々出来るのを見るまでは決して教員になるなと有爲の青年の間を説いて歩く。教育者になつたばかりに自分の子弟の教育に差支へてゐる人が現在随分あるからね。』

『大にやるべしだよ。社會のためだ。』

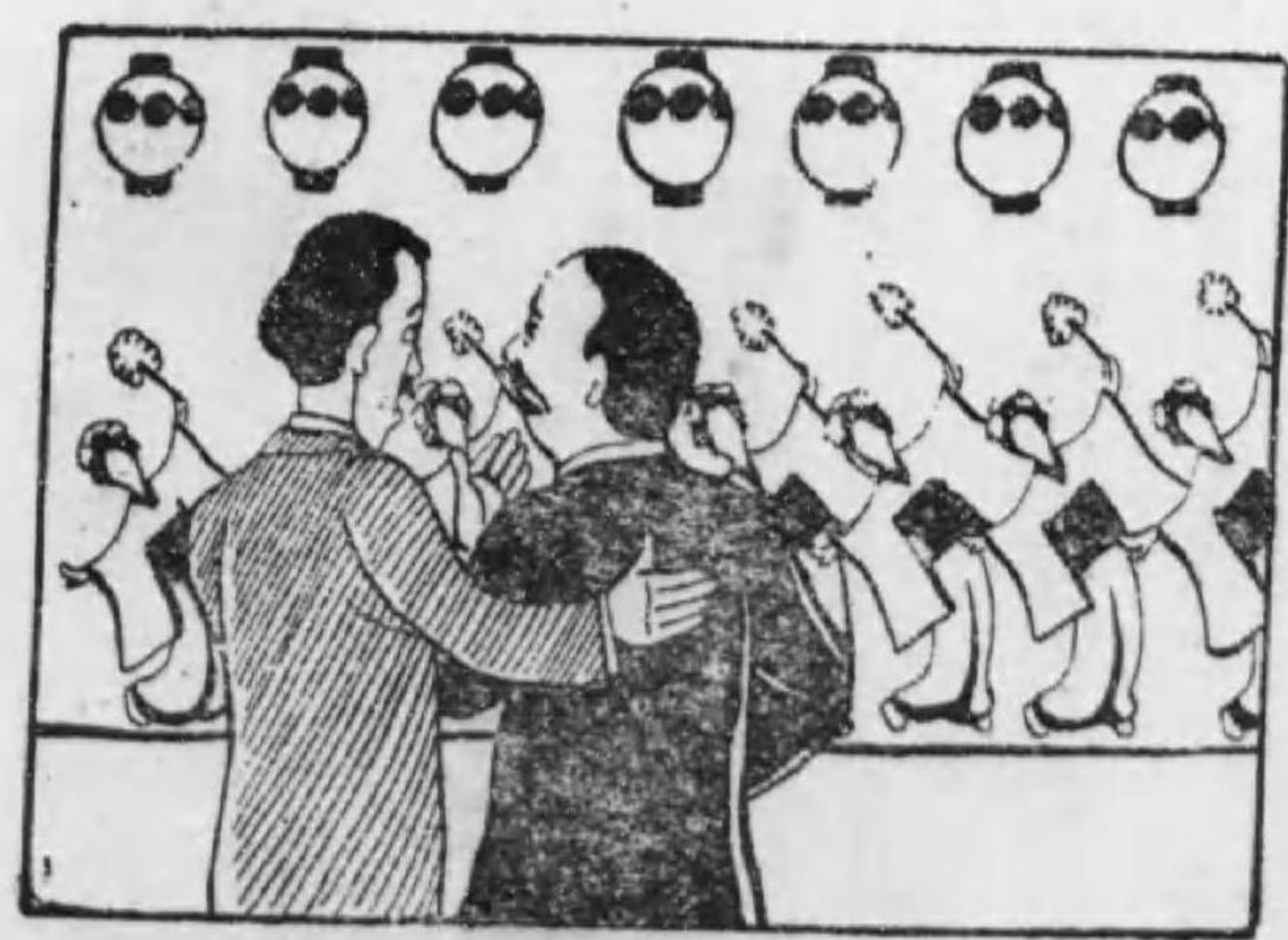
『僕もペテンにかゝつてゐるのか知らう？』
と同じく先生の三輪さんが考へ込むだ。

『さうさね。私立は都合の好いところ丈け官立を標準にする
から、やつぱり間接ペテンだらうね。』
と柴さんは断定して、

『まだ早いけれど新京極でも見ながらブラ／＼出掛けやう
か。』

駄屋町から新京極は目と鼻の間だつた。うつかりしてゐる
とすぐ足を踏まれさうな人出で、こゝは毎晩かうださうだ。
活動寫眞館の前で柴さんは孫の手を引いた白髭の老紳士に
行きあつて挨拶を交した。

『同僚だね？』
と團さんが尋ねた。



『さうだ。彼の人は頭の毛の色素がなくなるまで勤続してこの頃漸く三級になつた。それでも異数の昇進として羨望の的になつてゐるぜ。』

と柴さんはまだ文部省のペテンを問題にしてゐた。僕は振り返つて老紳士を目送しながら、教員には決してなるまいと決心した。

日本橋通りのやうな四條へ出て大橋を渡り、祇園へ折れて歌舞練場へ入つた。待つてゐる間に白粉をコテ／＼と塗つたお凸の舞子が薄茶とお菓子を持つて來た。

『この串團子の模様が祇園の表象ですよ。是は持つて歸つて宜いのです。』
と柴さんが土器の菓子皿を指して教へてくれた。成程、團子の繪が描いてある。

『戴いて行きますわ。』
と田鶴子さんは、お菓子諸共粗末な皿を紙に包むだ。

やがて踊りが始まつた。三十名に餘る妙齡の女が着飾つて舞ふのだから綺麗には相違ないが、要するに同じことばかりなので、僕は間もなく倦きて了つた。背景だけは他に類がない。どこの風光でも宛然實物に接する感を催させる。日本一の美人市場と聞き及んだが、兩側の囃し方と正面の舞

子が幾度代つても、生菩薩らしいものは一人も見當らなかつた。

『案外つまらないもんだね。』

とお父さんも退屈したやうだつた。

『好いさ。綺麗ぢやないか。』

と三輪さんは嬉しがつてゐた。

『もつと大きなのが裸體で踊らなければ駄目だ。』

と團さんは欠伸をした。

第十回

朝起きやうの遅かつた所爲もあるが、雨の止むのを待ちながら話し込んでゐる中にお晝近くになつて了つた。昨夜都踊りから歸るか歸らないに大雨沛然と來た時、

『間一髪だつたね。世の中は萬事斯う行かなくちや嘘だ。』

と得意がつた團さんも今日はさう甘くは問屋で卸して呉れないものだから、「雨」とある天氣豫報を又翻つて見ながら、

『要するに程度問題さ。晴れたつて完全に濕氣のないことはない。殊に低氣壓の蟠つてゐる時は上から落ちて來なくても前後左右一種の雨に取り巻かれてゐるんだからね。』

と言つて、餘り意氣が揚らなかつた。程度問題を擔ぎ出すのは大抵思はしくない時だ。

『降つても構はないさ。張子ぢやあるまいし。』

とお父さんも負け惜みが強い。困り切つてゐながら困るとはナカク言はない。獨り三輪さん丈けは、

『困つたなあ。僕は蝙蝠傘を拘られて了つた。』

と卒直に歎息した。

『剛情だね。いくら言つても分らない。蝙蝠傘なんか拘る奴があるもんか。彼は君が奈良の停車場の待合室へ置き忘れて來たんだよ。』

と團さんが言ひ聞かせた。

『然麼に場所までちやんと知つてゐながら君は黙つてゐたのかい？』
と三輪さんは逆撫ぢに出た。

『理窟を言ふぜ。承知で黙つてゐた次第でもないが、實は君の蝙蝠傘には東京驛以來尠からず辟易してゐたのさ。だつて君は田舎漢のやうに蝙蝠傘を擔ぐ癖があるだらう。さうして改札口では屹度僕を押し退けて先へ出るから目を突かれさうで危くて仕方がない。奈良以來不思議に苦勞がなくなつたと思つてゐたら品物がなくなつてゐたんだね。』

『結果だけに満足して原因を究めなかつたんだね。ほんやりしてゐるぜ。』

『恐れ人つた。斯ういふ先生にかゝつちや逆も敵はない。』

と團さんはもう相手にならなかつた。

『蝙蝠傘を掏られる。萬年筆を掏られる。一ダース持つて來たハンカチもこれ一枚になつてしまつた。旅行は實際油斷がならない。』

と三輪さんは忘れたり落したりして失した物を悉皆掏摸の所爲にした。

『時に何うするね？ 雨を冒して嵐山へでも出掛けるか？ 待つてゐたつて何うせ止まないぜ。』

と今日の案内役の星野牧師が欠伸をした。

『然うさね。能く降る雨だなあ。』

とお父さんは煮え切らない。

『大人連中は馬鹿ばかり言つてゐるから宜いけれど、子供衆が退屈だぜ。』

『何なら一つモーセの話でもしてやつて呉れ給へ。』

『イヨく晴れる見込がないなら豫定を變へて芝居へでも行かうぢやないか？』

星野君、牧師だつ

て芝居ぐらゐは差支ないだらう？』

と三輪さんが言つた。

『僕は芝居へでも活動へでも行く。職業柄却つて世俗に遠ざからないやうに努めてゐる。南座には

今雁次郎が來てゐるよ。』

とこの牧師さんは案外話せる。

『芝居は感服しないね。やることが悉皆八百長だから退屈して了ふ。』

と團さんは早速故障を唱へた。

「團君は芝居は駄目だよ。一度引つ張つて行つた事があるが、彼ぢや實際退屈するだらうと思ふ。相撲を見る氣であるから皆目分らないんだね。さうして大道具の立付を始終氣にしてゐる。但し、「先代萩」の御殿が何かには大に感服したぜ。彼の大勢並んでゐる若い女は無論男だらうが、一體何ものだい？」と訊くから「御殿女中さ」と答へると「ふうむ、皆女中か？ 流石に封建時代は女中拂底ぢやなかつたんだね。感心した」と固唾を呑むでゐた。何うも力瘤の入れどころが違ふ。餘程感激したと見えて幕になつて辨當を喰へ始めても矢張り御殿女中の事ばかり言つてゐる。餘程が悪くなつて、もう此男と一緒に芝居へ來るもんぢやないとツクツク思つたよ。僕は外聞とお父さんが紹介に及んだ。

「女中に逃げられて難澁してゐた矢先だもの、つい身につまされたのさ。」と團さんが辯解のやうに言ふと、田鶴子さんも、

「彼の折は餘程感心なすつたと見えて、那樣いふ教育的の芝居なら子供を連れて行つても差支ないからお前も見て來ると宜いなお母さんに仰有つてゐましたよ。」と其時の事を思ひ出した。

「其は感心するさ。桂庵へ嘆願しても一人も寄越して呉れないのに十八人もずらりと並んで其が皆揃ひも揃つて別嬪だつたからね。トラホームや腋臭らしいのは一人もゐない。那樣いふ光景は雇人拂底に苦しむ現代人には確かに目の藥だね。少くとも彼の芝居を見てゐる間は女中問題を忘れてゐるから有難いぢやないか。這麼風に考へると劇なんでもものも案外無用の長物ぢやないかも知れないよ。」



「御高説恐れ入るよ。しかし一番身につまされるところが御殿女中の數だと聞いたなら「先代萩」の作者は確かに泣くぜ。星野君、世間には斯ういふ先生があるんだから君も説教には随分苦心するだらうね。」

「否、芝居の分らないのが團君の好いところさ。ダルウインは中年から音楽が全く分らなくなつて了つたと言つてゐる。」

「實務家は兎に角、思想の世界に住むものは或程度まで片輪にならなくちや駄目だよ。」

と星野さんは團さんの爲めに辯じた。

『僕も大に同感だ。十日も旅行をして何一つ持物をなくなさないやうちや餘り實務的で人間としての餘韻がない。』

と三輪さんは未だ蝙蝠傘を惜がつてゐた。

『今日は方々から名論卓説が出るね。しかし好い氣なもんさ。君は先刻から團君の煙草を喫つてゐるぜ。』

とお父さんが注意した。

『敷島なら何人のだつて同じ事さ。僕は餘り自他の差別を設けない。』

と三輪さんは平氣で言つた。

『流石に餘韻がある。』

と團さんが笑つた。

這麼太平樂を並べてゐる中に、

『坊ちゃん、彼が京都のドンですよ。』

と星野さんが教へて呉れた。成程ビニューウといふやうな汽笛が尻上りに喧しく鳴り渡つてゐる。

『彼がかい？ ドンまで間が伸びてゐるね。』

と團さんが貶した。

『ふむ、未だ鳴つてゐる。那樣長くちや聞いても痛切に腹が空らないね。』

とお父さんも言つた。

『ドンといへば大砲に限ると思つてゐるところが淺ましい。君達は考へないから困るよ。口では軍國主義を否定しても國民擧げて時計の針を陸軍の大砲の音に合せてゐるんぢや外國人が本氣にしない。ところが流石に平安城都のドンは違つたものだらう？ 全然平和の音だからね。』

『然う來られると一言もない。矢つ張り牧師は着眼點が違ふね。』

と三輪さんが感心した。

『日本の大都會で軍隊に時間を支配されてゐないところは獨り我が京都あるばかりさ。此點丈けでも洛陽は誇るに足りるよ。』

と星野さんは京都に歸化したと言つてゐる丈けに頗る西京風最だ。

『何うも宗教家は解釋が我田引水だから氣に入らない。彼のドンに然麼國際人道的の意味があるも
んか。假りに東山あたりで、毎日大砲を打つとして見給へ。折角の保護建造物が皆ガタガタに狂つ
て了ふぜ。そこで骨董大切の窮策が那麼妙な悲鳴を擧げてゐるのさ。間が伸びてゐて而も實用的の
ところは、表向き丈け悠長で肚の中の悪ごすい西京人の特性を遺憾なく現はしてゐる。』
と團さんは遠慮のない事を言つた。

『矢つ張り商買柄建造物の保護とすぐ分るんだね。實際然うさ。便宜上の問題だけれど、結果から
言ふと京都では藝術の權威が武力を沮み止めてゐる事になるだらう。』

と星野さんは主張した。

間もなく女中がお膳を運んで來た。

『那麼ドンでも矢つ張りお晝御飯が出るのね。』

と田鶴子さんが内證で僕に言つた。これだから躑躅は大切だ。子供は何でも親の眞似をする。

『京都は鯉が名物と見えるね？ 鯉ばかり食はせる。』

と團さんは然麼事情には頓着なく大胡坐をかいたまゝ箸を執つた。尤もきちんと坐つてゐるものは

一人もゐない。星野さんまで立膝をして爪先に貧乏揃りといふ奴を演じさせてゐる。禮儀作法も不
公平なものだ、女と子供丈けに正座を要求する。

『魚の不便なところだから不漁の時の用心に鯉を圍つて置くのさ。此奴は這麼に骨つほい丈けに壽
命が強いさうだからね。』

と星野さんが答へた。

『叡山に鯉を獻すといふから京都人は昔から鯉を利用したもんだね。』

とお父さんが言ふと、團さんは、

『坊主が鯉を食ふのかい？』

『否、漢字の覺え悪いといふ例に持ち出す文句さ。『叡山に鯉を獻す』と即座に書ける人は滅多にな
い。』

『成程ね、僕にしても確信のあるのは山といふ字ぐらゐるものだ。閑人丈けに君は妙な事を知つて
ゐるね。』

『鯉はこれでナカ／＼うまいよ。しかし京都の名物は一體何だい？』

と三輪さんが訊いた。

『さあ、餘り名物もないね。』京の着倒れ大阪の食ひ倒れといふほどだから、此處へ來たら食方は諦めるんだね。八ッ橋に五色豆、蕪の千枚漬にすぐき漬ぐらゐるものさ。』

との靈の糧を扱ふ星野さんは肉體の榮養物に興味を持つてゐないらしい。停車場の賣子の呼聲を其儘取次いで呉れた。

見限つてゐた天候が晝から快ろしく慾の皮が突つ張つて來た。晝前の損失までも償はうといふ意氣込みで團さんが自動車を急が



復し始めたのは何よりの仕合せだつた。空模様ぐらゐる人間の無定見を曝露するものはない。傘を持たないで出掛けた場合一寸怪しくなつてくると一生取り返しのつかない大失敗をしたやうに思ひ、又晴れさうになると今度は元來自分に先見の明があつたやうに感じる。先刻まで一日丸潰れと覺悟を定めてゐた僕達も、雲間二三尺の青空に恐

せた事！ 北野の天満宮へ差しかゝつても、

『京都へ來て這麼ものに一々敬意を表してゐる日には一月かゝつても足りないよ。』と斷つて素通りをしてしつた。

間もなく金閣寺に着いた。大木好きの三輪さんは一位の木といふのに感心して、僕達が上り込むでも未だ空を仰いでゐた。案内人は早速庭石や古道具の名前を朗吟し始めたが、例によつて見せるよりは通り抜けるのが目的だから、舟形の松と、昔塔の上にあつたといふ鳳凰の像ぐらゐるしか頭腦に残つてゐない。

一面池になつてゐる庭の景色丈けは閣の二階からゆつくりと見晴らした。雨上りの若葉がキラキラと光つてゐて眩しいほどだつた。

『好いところね。あら、大きな鯉がゐるわ。』

と田鶴子さんが言つた時には三輪さんは最早鯉を買つて投げてゐた。緋鯉や真鯉が押し合つてバクく喰べる。

『もつと大けなのがるたんどすが、四五年前に鯉取りが入つて皆持つて參りました。』

と番人も僕達の仲間入りをして欄干に凭れた。いくら金閣でも朝から此處に坐り續けてるたら退屈するのだらう。

『鯉取りつて泥棒かね?』

とお父さんが訊いた。物取りは泥棒、月給取りは無産階級、塵取りは勝手道具と心得てるが、何の取りに屬するの僕も多少疑問があつた。

『他のものを取つて行くさかい盗人や。』

『矢つ張り鯉泥棒だね。此奴は面白い。』

『一寸も面白い事あらしまへんで。』

『其にしても池の中の生物を悉皆取られるとは油断だつたね。』

『油断つて、あんた、鯉を盗むもんがあると思ひまへんわ。其に家の中の品物と違つて、野放しとすさかいに、取ろと思つたら困難あらしまへん。此の向ふ側は直きに往來とすせ。夜分彼の邊から入つて来て何か毒を撒いたんです。そして鯉の弱つたところを揚げて行きました。魚は口が利けまへんやろ。』泥棒』とも何とも言ひまへん。樂なもんや。』

『さうして鯉取りは捕つたのかね?』

『捕りました。三人がかりで荷車に二臺取つたんどすて。皆三尺からのばかりです。何と好い商賣ぢやおへんか。生物ぢやて長く置けんに賣り急いださかい足がついて……』

と番人は僕達が歩き出しても未だ池を相手に話してゐた。

嵐山への途中太秦寺といふのに寄つた。

『這麼門がこれで保護建造物だからね。』

と星野さんが古い山門を指して言つた。

『これが蠶の社でいますか?』

と田鶴子さんが尋ねた。蠶の社へ詣れば絹物に不自由しないと今しがた聞いたので、お賽錢を上げる積りらしかつた。女は大陸文學の誤譯を愛讀して新しがつても、問題が美容の事になると一溜りもない。鼠の天麩羅の香を嗅がされた狐のやうに忽ち理性を失つて了ふ。

『否、これは太秦の廣隆寺といつて、何でも支那の歸化人に關係のあるところですよ。昔支那から各種の職工が大勢渡つて来て此邊に落ちついたさうです。太秦といふ名が何となく日本らしくない』

でせう？」

『然うでございますね。』

『日本らしくない事もないさ。』

と團さんが口を出して、

『しかし秦といふ字だね。秦といふ男が自分の苗字は支那から来たと言つてゐるたぜ。矢つ張り工學士だから、彼奴は其支那の職人の子孫か知ら？』

『然うかも知れないよ。しかし其支那人の中にイスラエル人が交つてゐると聞いたら驚くだらう。』

『驚いてやらう。それから何うしたい？』

『何うもしないが、此處に其イスラエル人の掘つた井戸が残つてゐるんだよ。序だから見て行かう』と星野さんは僕達を附近の百姓家へ案内して、大きな井戸を紹介した。好い水が湧いてゐる。

『成程、來歴のありさうな井戸だね。』

とお父さんが言つた。四角な石の井戸側に「井浚ひ井」と深く彫つてある。

『井浚ひ井では名前として何うも意味を爲さない。昔の人はイスラエルなんていふ固有名詞を知らなかつたから、苦し紛れに這麼宛字を使つたんだね。』

と星野さんはイスラエル人の輸入に努めた。

『面白いね、一發見だよ。』

と三輪さんは共鳴したが、團さんは、

『井浚ひがイスラエルか？ 東京には伊皿子といふところがあるぜ。始終説教をやつてゐるだけあつて、扶ちつけの巧い事驚いて了ふ。』

と約束通り驚いた。

太秦から嵐山までは間もなかつた。途すがら、

『京都も此邊は草深いね。竹籤ばかりぢやないか？』

と三輪さんが外を覗きながら言つた。

『此處らは最早在所だもの。竹籤は多い筈さ——京都は團扇や扇子の産額が日本一だからね。藪が大財源だから枯らさないやうに竹専門の産業技師を置いてある。』

と星野さんが説明した。

『これをこそ藪醫者となんいふめれさ。竹取の翁の庶弟の子孫で竹内直太郎といふ人だらう？』とお父さんが交ぜ返した。

『否、實際だよ。竹では世界的の學者ださうだ。』

と星野さんが本氣に主張すると、

『世界的ぢやない。東洋的さ。竹は西洋にはないよ。』

と團さんが訂正した。斯う臆面なしに物を言ふ連中にかゝつては案内者も全く容易でない。雨上りにも拘らず嵐山には最早大分人出がしてゐた。渡月橋へ差しかゝつた時星野さんは、

『これはいけない、水が濁つてゐる。平常は清流で底が能く見えるんだけどね。』と豫め苦情を封じ積りらしく言つた。向ふ岸へ着いても、

『此處の櫻は晚いからね。漸く綻び始めたばかりだ。これが満開になると素晴らしいもんだぜ。』と條件をつけ、川端を辿つてブラ／＼上りながらも、

『此處を舟で少し上らないと嵐峽の眞價は分らないんだが、生憎今日は水が増してゐるから駄目だ。』

と残念がつた。

『八方塞りだね。』

とお父さんがソロ／＼始めた。

『櫻の満開も好いさうだが、紅葉の時が又格別だつてね。雪景色は天下一品だといふし、雨なら雨で一入の風情があるさうだ。萬能膏は唯自分の病氣に丈けに利かない。それにしても悪い眺望ぢやないね。』

と團さんは妙な褒め方をした。

『好いところさ。東京市内には迎も這處ところはない。しかし厭に寒いね。京都は底冷えがするといつたが眞正だ。』

と三輪さんが言つた。

戸灘瀬の瀧まで行つて引き返し、田鶴子さんの御所望に従つて小督の塚といふのに寄つた。容姿を全幅とするものには死は絶対に萬事の終焉と見える。可哀さうに、石塊が三つ四つ藪藪とした立

木の下に積むであるばかりだった。

月にも花にも好いといふが、やはり花で人を呼ぶ積りらしく、嵐山では櫻の花を鹽漬にして賣つてゐる。三輪さんえ其を夥か買ひ込むと、星野さんは、

『君、然麼に澤山何うするんだい？』

『大阪へ土産に持つて行くのさ。』

『其奴は思ひつきだ。』

とお父さんも買つた。

『此鹽漬では僕は失敗した事があるよ。未だ來たばかりの頃教會の青年から買つたが、飲むものは知らないから、悉皆ムシヤク喰べて了つてね。』

と星野さんは自動車に乗り込むでからクスクス笑ひ出した。さうして、

『其も黙つてゐれば宜いのに、お禮の序に「しかし彼は案外鹹いものだね」と正直なところを言つたので、今に逸話が残つてゐる。』

『宜いさ。それぐらゐ度胸が据つてゐないと兩本願寺の膝元で基督教の傳道は出來なからうから

ね。』

とお父さんが言つた。

昨日は雨で見すく半日潰れたから其分の取り返しをする爲め今日はナカク忙しかつた。朝早く宿屋を引き拂ひ午後大阪へ立つまでの時間を最も有効に利用しやうとあつて、案内役も星野さんと柴さんの二人がかりだつた。まづ手近から片付ける事と御所を堺町御門から何とか御門へ通り抜けた。停留場で電車を待つてゐる間に、

『學校騒動と財政困難で有名な同志社は直ぐ此向ふで相國寺の隣りです。』
と柴教授が特に僕に教へて呉れた。

『此案内人は碌な事は言はない。』

と星野牧師が笑つた時、若い夫婦が歩み寄つて丁寧にお辭儀をして行つた。星野さんが其後姿を見送りながら頻りに小首を傾けてゐると、

『何うしたい？』

とお父さんが訊いた。

「驚いたよ。彼奴等は二三日前に喧嘩をして別れるの何のと
願いでゐたんだが、最早仲が直つて二人で花見にでも出掛け
るところらしい。」

「結構ぢやないか。」

「無論結構さ。しかし僕のところへ何とも言つて来ないのは
不都合だよ。」

「君の方の教員かい？ 夫婦喧嘩は一々顛末を牧師さんの
ところへ届け出る規則なんだね？」

「然る事もないが、彼の二人ほど喧嘩をする夫婦は珍らしい
ぜ。一年の半分は何とか彼とか競り合つてゐる。さうしてそ
れが大きくなると必ず僕のところへ持つて来るから厄介さ。

一度は亭主が何うしても離縁すると言ひ出した。僕は餘り煩いから、「よろしい、離縁し給へ。那麼



虚榮の強い女は僕も嫌ひだ。僕が仲人と談判してやる」と強く出てやつた。すると其晩またやつて
来て、「先生、離縁は最早見合せました」と最早ニコ／＼してゐる。「何うせ然る事だらうと思つてゐ
たよ」と吐き出すやうに言つてやつても、「しかし、先生、若い婦人の悔い改めたのは實際美しいも
んですね」と頗るお芽出度い。「然るでれ助だから君は駄目だよ」と突き飛ばしてやつても突ん踏つ
たま、矢つ張りニコ／＼してゐた。彼奴は餘つ程馬鹿だよ。」

「亂暴な牧師があつたもんだ。しかし説教ばかりでなく然る家庭の問題まで引き受けるんぢやナカ
／＼骨が折れるね。」

「骨が折れるよ。さうして夫婦喧嘩の裁判くらゐ危険なものはないね。うつかりした事を言ふと後
に責任が残る。今の夫婦にしても仲が直れば亭主が細君に、「先生はお前は虚榮心が強いから嫌ひ
だと言つてゐたよ」ぐらゐな事を言ふ。「あなたも然う仰有つたんでせう？」と細君が訊けば、「否、
俺は言はん。妻の悪口を他へ行つて言ふ奴があるもんか」「一體牧師さんが教員員の陰口を利くつ
て法があるんでせうか？」「然る法はないさ。何うも彼の牧師は少し不謹慎だよ」といふやうな結
論になる。骨を折つて怨まれるんだから實際馬鹿氣切つてゐる。」

『信者でも夫婦喧嘩をするのかなあ。しかし京都の電車はナカ〜来ないね。』
と團さんが待ちあぐんだ。

『来たよ〜。込んでゐるぜ。』
と殆んど同時に三輪さんが言った。

『東京と同じさ。従業員に碌な俸給を呉れてゐないからね。』
と柴さんは今日も一級俸問題を論じる積りと見えた。

御所の内が案外長かつたに反して、餘程遠いのだらうと思つてゐた岡崎公園は乗ると間もなかつた。地圖は持つてゐるが、田鶴子さんにしても僕にしても其を人中で擴けて見て態々お上りさんの廣告をする氣になれないから不便だ。直ぐに物産陳列館へ入つたけれど、鳥羽の眞珠で懲りてゐる團さんは西陣織や友禪染の並べてあるところは成る可く早足で通り、

『京都にも三輪君のやうな人がゐて「安全地帯」を「帯地全く安し」と讀むださうだが、此處で田鶴子に然麼讀み方をされると事だからね。』

と内證でお父さんに言った。その代りに佛具のやうな強請られつこない品物は特に入念に吟味し

て、

『此佛壇の九百五十圓は安いよ。』萬壽寺通佛具屋町角、佛屋善右衛門製作』とある。善右衛門にしても悪右衛門にしても兎に角安いもんだ。』

と大安心で褒めてゐた。

『佛屋善右衛門は面白いね。抹香臭い商賣に能く調和してゐる。其に佛具屋町が有難い。』
と詰まらない事に感心するお父さんは手帳に書き留めた。

『動物園は何うです？ 此處のは東京のよりも設備が好くて獅子が子を産みますよ。』
と星野さんが勧めて呉れたが、今更お猿さんでもなからうと思つて辭退した。

疏水傳ひにインクラインへ着くと、
『船頭動かずして舟山に登るといふのは此處ですよ。』

と柴さんが言った。

『御覧なさい。舟が鋼條で坂を登つて行くでせう？ 下りて来るのもあります。那樣やつて坂の向ふの川へ取り次ぐのです。舟が山越をして山城近江を往來すると思ふと面白いでせう？』

と星野さんが具體的説明の勞を執つた。

南禪寺を一見して黒谷まで歩いた。彼の山門に匿れてゐたといふ縁故で途中の話題は石川五右衛門が嚮斷した。

「兎に角三十人力あつたといふから體格丈けでも豪い奴さ。

石川五右衛門といふと盜賊とは承知してゐながら何となく悪い感じがしない。日本のロビン・ハッドだね。」

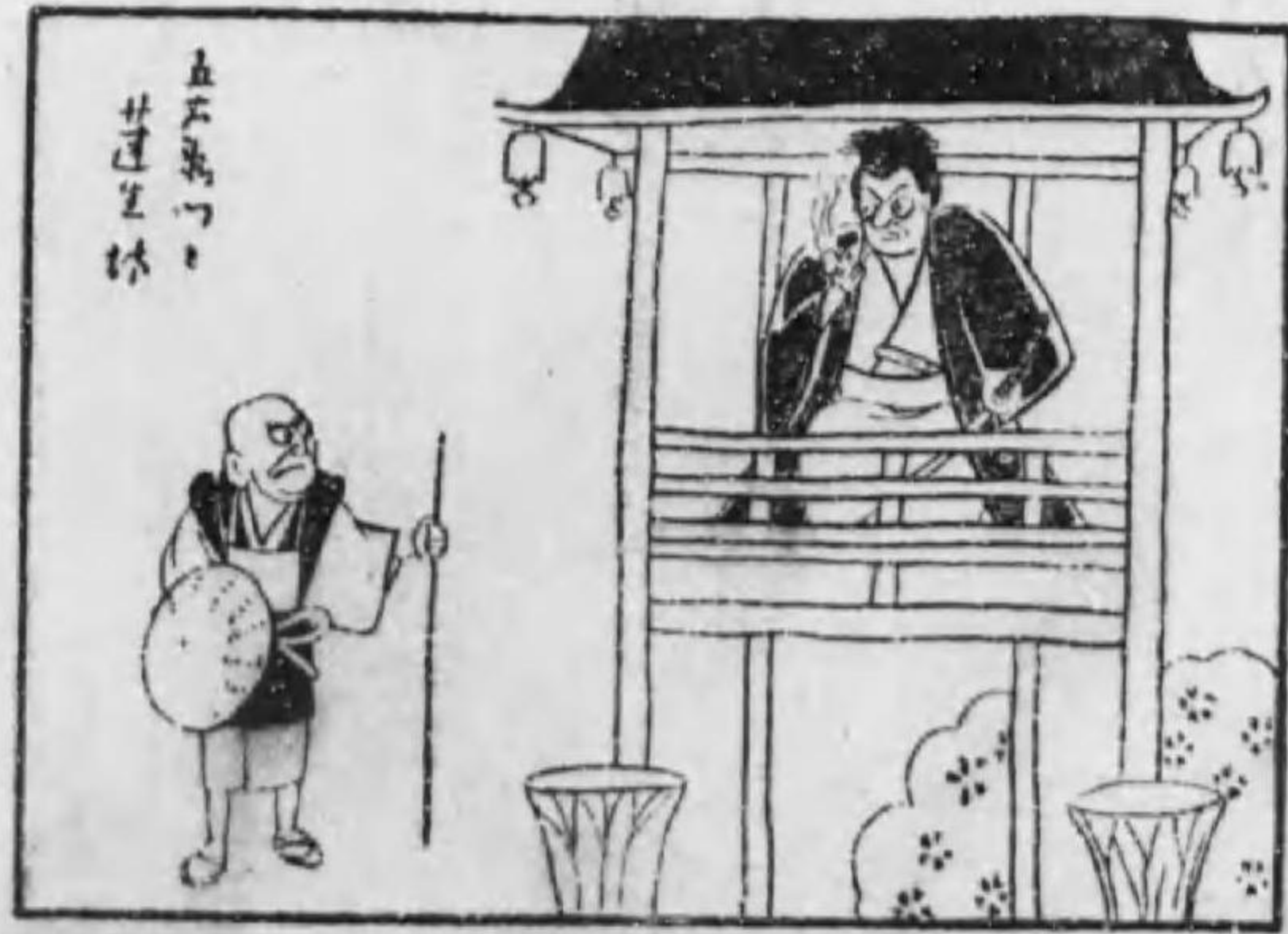
と柴さんは懐しがつた。

「義賊俠客反謀人の類は其となく柴君の彌次馬性に訴へると

ころがあるんだね。君は自分の家さへ焼けなければ火事は面白といふ組だらう？」

と流石に星野さんは五右衛門に共鳴しなかつた。すべて聖書に載つてゐない人物の價値は認めない事にしてゐる。

黒谷では「熊谷鐵掛けの松」といふのが枯れてゐた。妙に強いのが鉢合せをする。直實は何人力



だつたか知らないが、出家をしても、「熊谷法力入道蓮生法師」といつて未だ鐵の棒でも振り廻し

さうだ。
「強さうな坊主だね。これでは軍馬の蹄の音に聞き惚れてゐて覺えず木魚を叩き破つたといふ話も

眞正らしい。」
とお父さんは石塔を見上げた。路を距て、向き合ひに「大夫敦盛空額隣莊大居士」といふのが立つ

てゐた。

間もなく星野さんが、

「これから吉田山へ登つて一段落かな。」

と獨言のやうに言ふと、團さんは、
「大文字なんか何うでも宜いよ。此連中は打棄つて置いてもいい加減物見高い上に、時間と空間の

觀念が全くないんだから、詰まらない入智慧は餘りしない事だね。蟻り觀音詣りぢやあるまいし、
然う一々寄つて歩いちゃ果しがたいよ。」

と注意した。山と聞いて例の通り恐れを爲したのらしい。

『大文字つて何?』

と田鶴子さんが僕に訊くと、

『今の話ぢやないんですよ。』

と星野さんも山登りは嫌ひらしく、

『盆に如意が獄で大の字形に焚く送り火の事で、吉田山へ登つたら其跡が見えるだらうつていふんです。』

と暈して了つた。燃え盛ると大の字が明々と中空に浮いてるやうで頗る壯觀だぜと先刻は頻りに提燈を持つてゐたのに。

『時に僕の模擬家屋は此直ぐ先だから一寸寄つて行つて呉れ給へ。』

と柴さんが藪から棒に招待した。此邊は住宅地と見えて同じやうな黒門構へが並んでゐる。僕達は其一軒へゾロく〜と入つた。何しろ大人數なので、

『お嬢さんも坊ちゃんも何卒お敷き下さい。模擬蒲團を。』

等と柴さんは韓旋に努めて、奥さんを紹介した。

『夫人丈けは模擬夫人ぢやない。最愛の細君だぜ。』

と星野さんが註を入れた。

『星野君には終始笑はれるが、實際模擬生活だよ。東京へ歸らう〜と思つてゐるもんだから世帯

道具にしても永久的のものは買ふ氣にならないからね。』

と柴さんは支那まがひの大きな瀬戸火鉢を撫ぜながら言つた。

『其も確に然うだらうね。朝鮮や臺灣へ行つてゐる友達も終始然麼事を言つて来るよ。』

とお父さんが同情した。いくら東京最良でも京都を植民地と一緒にするのは酷い。

『不平は人一倍言ふ上に然麼腰掛主義でゐられたんぢや學校で困るだらうね?』

と團さんは學校に同情した。

『腰掛主義よりも嚙りつき主義の方が困るやうだよ。しかし不思議なもんだね。這麼模擬家庭で這

麼模擬生活をしてゐても子供がもう四人出来たぜ。是丈けは模擬ぢやない。眞物の證據に一番小

いのが一昨日から病氣になつて模擬看護婦に来て貰つてゐる。』

『冗談は兎に角經過は眞正に好いのかい?』

と星野さんが尋ねた。

『有難う。危険はないらしい。少し慌て過ぎたんだね。』

『子供が四人は羨しいなあ。動物園の獅子さへ子を生むさうだから僕のところも京都へ越して来やうか知ら。』

と少時してから三輪さんが然も好ましさに言つた。

『京都は實際子供が能く出来る。星野君のところなんかは信者の出来ない年はあつても子供の出来ない年はないやうだ。』

と柴さんが素破抜くと、星野さんは、

『手厳しく来たね。一言もないよ。實は八人目が近々生れるのさ。』

と告白に及んだ。

『其はお目出度い。それぢや少くとも八人丈は信者を拵へた事になるぢやないか。決して悪い成績ぢやないよ。』

と三輪さんが眞面目になつて慰めたので奥さんまで大笑ひをした。

病人のあるのにお氣の毒だからと柴さんを其模擬家庭に残したま、僕達は間もなくお暇をした。

ハツ橋は生に限ると今がた味を覺えた其生のを澤山買ひ込むで、熊野神社前の停留場へ來ると人群りがしてゐた。

『車掌と學生の喧嘩だ。これは面白い。』

と星野さんは振り出し物でもしたやうに言つた。牧師さんで納まり返つてゐても時々野性を發露する。尙ほ驚いた事には最も物見高くない筈の團さんが忽ち人を押し退けて論判の現場へ割り込むだ。丁度其折一紳士が、

『此方は下りない中に私の肩越しに手を伸して確かに渡しましたよ。』

と仲裁に入つた。

『否、受取らひまへん。』



と車掌は第三者は相手にせず。

『あなた、渡したいふ證據がありませんか？』

と何處までも當事者を追求して腕のところへ手を掛けた。これが東京なら本人は素より傍の者が黙つてゐない。然るに大學生は險惡な色を示しながらも切符の二重拂ひをして穩便に問題を解決して了つた。流石に京都は悠長だと思つた利那、車掌が其場へ地響きのするほど叩き倒されたのには僕も吃驚した。

『何で人を叩く？』

と車掌はヨロ／＼しながら敦圍いたが、大學生は、

『叩きたいふ證據がありませんか？』

と反問して悠々と歩み去つた。

『痛快だつたね。』

と團さんが溜息を吐いた。

『京都の學生はナカ／＼荒つほいね。』

と三輪さんは喜ばなかつた。

『荒つほいよ。學生に限らず車掌でも彼の通りだ。演説會なんかでも京都ぐらゐる彌次の多いところはない。』

と星野さんが言つた。

『兎に角今のは車掌が少し附け上つてゐたね。』

と是はお父さんで、

『車掌ぐらゐる不都合なものはないよ。』

と未だ憤慨してゐたのは團さんだつた。

新京極で電車を下りて牛肉屋へ上り込む。此處でお晝を喰べるのが昨日から豫定になつてゐたところを見ると、「すき焼」は京都の名物らしい。這麼大仕掛の店構へが何軒となく單に牛の肉を食ふ爲めに出来てゐると思ふと、何も知らずにゐる牛に氣の毒な心持がする。

『此玉子は何うするんだね？』

とお父さんが柄になく鍋の番を勤めながら訊くと、

『斯う皿に破つて肉を受けて喰べる。』

と星野さんは未だ生煮えらしいのを挟むで實地例證をした。

『關西では皆かうさ。これ丈は東京でも眞似をすると宜いね。』

と隣の鍋を引受けてゐる團さんが言つた。

『時に先刻の喧嘩には大に力癪を入れてゐるたね。僕は君が手を出さなければ宜いがと心配してゐたよ。』

と星野さんが言ふと、

『手は出さないが、前後の關係が能く分らないので口を出せないのに弱つたよ。電車の車掌くらの不都合なものはない。』

と團さんは餘程車掌が嫌ひらしい。

『妙に車掌に反感を持つてゐるね。』

『實は僕のところの助手が此間車掌に撲られたのさ。尤も仇は早速討たせたが、妙なもので、其以來相手が車掌だと他の事でもつい黙つて見てゐられなくなる。』

『ふうむ、大分念入りだね。何うしたんだい、一體。』

『助手が丁度先刻のやうな事で先方を撲つたんだね。先に手を出したんだから悪いには相違ないが終點の車庫前だったので車掌仲間に取巻かれて了つた。可哀さうに袋叩きに遇つたさうだよ。僕は憤慨したね。』

『君の事だから黙つちやるなかつたらう。』

『大に將來を戒めてやつたよ。』君は日本の最高學府で教育を受けて而もボートの選手だつたぢやないか？ 田夫野人の車掌に打ち踏されて口惜しくはないか？』つてね。』

『豪い説諭があつたもんだ。』

『すると助手は「何分衆寡敵せずで不覺を取りました」と言ふから僕は一策を授けてやつた。星野君、君は一人で大勢を相手にする場合の秘訣を知つてゐるかい？』

『牧師が喧嘩の秘傳なんか心得てゐるもんか。』

とお父さんが横から口を出した。

『牧師だから特に多少研究して置く必要があるのさ。教會で始終大勢に接してゐるからね。』と團さんは教會を議會ぐるりに考へてゐるらしく、

(田中加門、下巻)

「僕達は同時に二個の空間を占める事は出来ない。考へて見ると自由や平等なんかよりも此原則の方が遙かに深く社会生活の根本義を爲してゐる。此奴が崩れた日には、此煮え滾つた牛鍋が何時僕達の頭の上で宙返りをするかも知れない。同時に二個の空間を占め得ないといふ原則から推すと格闘のやうに相互の接觸面積の多い喧嘩では三人以上の數で同時に一人を有効に撲るといふ事は全く不可能になる。それだから大勢だからつて恐れる必要は少しもない。何人ゐても一人と闘ふ精神でやる。十人も利那的には一人だから其一人々々を手近から片付けて行く。衆寡敵せずといふのは多い方の頭數よりは少い方の體力の問題さ。又芝居の悪口を言ふやうだけれど、日外見た彼の丸橋忠彌の立廻りは全然此法式に背いてゐる。數十名の捕手が同時に同一の空間を占めやうとするものだから、ワイ／＼いふ丈けで一向埒が明かない。忠彌の方でも狼狽の餘り、數十人實は利那的唯一人と認め得ないところが不覺で、無効の勞力に疲れた結果到頭動きが取れなくなつて了ふ。」

「成程一理ある。君は劇評を書くに宜いぜ。」

とお父さんが又横槍を入れた。

「ところで僕の家の助手は僕の忠告を服膺したから大成功を博した。」

「又やつたんだね？」

と星野さんが嬉しがつた。

「やつたとも。翌日同じ終點で前の日と殆んど同じ刻限に何もしなない車掌の頭をポカリと叩いて下り、追ひ縋ると突つ轉ばした。昨日の奴だとばかりに他の車掌共は直ぐに又取り巻かうとしたが、今日は撲られに來たんぢやないから接觸面積を及ぶ限り狭める爲めに扉を背中にして身構へた。何人ゐても一騎討と覺つて見れば此方はボートで鍛えた腕つ節だからね。忽ち六人まで撲り倒したは宜かつたが、巡査に捕まつて了つた。馬鹿だよ。要するにね。喧嘩一つ器用に出来ないんだから、仕事を委せて置いても不安心で仕様がなない。」

と話し終つて團さんは頻りに喰へ始めた。

「斯ういふ大將ぢや助手もナカ／＼勤め悪からうね。」

と少時してから星野さんが言つた。

「案外單純で好い男だぜ。人間は建築で儲けて株で損をして團仙吉と名乗るのが一番本式だと信じ切つてゐるんだからね。此邊の手心さへ分つてゐれば却つて機嫌が取り宜いよ。」

と三輪さんが言った。

『早くいへば土方の親分見たいなものだから、一遍の喧嘩で有らゆる車掌が憎くなるくらゐ子分が可愛いのさ。これで些つとは好いところもあるよ。』

とお父さんが言った。

『おい、子供の聞いてゐるところで勝手な棚下しをするなよ。それだから田鶴子が親の言ふ事を聞かなくなる。』

と團さんは笑つてゐた。

『盆になると坊主がお箸を持つて年始に来るから兎に角佛教に相違ない。』



* 停車場へ一時間も早く着いたので、又引返して東本願寺に寄つた。遠國から態々参詣に来るのに偶然時間が餘つたから入つて見るとは心掛けの悪い連中ばかり能く揃つたものだ。

『君達は一體西か東かね?』
と星野牧師は説教の材料にでもするの宗旨の審問に取りかゝつた。三輪さんは素より西も東も分らない。

と他人事見たいに言った。

『僕は君の方の傾向だが、家の宗旨は門徒だといつた。門徒つて東本願寺かね西本願寺かね?』
とお父さんも甚だ要領を得ない。團さんに至つては、

『僕のところは無宗教で、耶蘇も坊主も寄せつけない。うっかり来ると打ち踏すぜ。』
と旗幟頗る鮮明だつた。何にしても次の日曜に星野さんが、

『日本人の宗教心。』

と題して此三人の無頓着を憐れみ、基督教の把持力を高調する事は疑ひもなかつた。

本堂を拜見して廊下へ出た時、

『お嬢さん、これを御覧なさい。』

と星野さんが田鶴子さんの注意を惹いた。

『あらまあ、髪の毛ね!』

と田鶴子さんは恐しさうな表情をした。成程、髪の毛で拵へた太繩が鳧局を巻いてゐる。「越後國新鴻信徒獻納、長さ二十二丈八尺、廻り一尺一寸、この外に五十二房あり」と札が立て、ある。

『何うです？ 宗教の力は偉大なものでせう？』

と星野さんは圓轉滑脱だ。他の禪で相撲を取る事を忘れない。

『新潟では這様に大勢尼さんになつたのでせうかね？』

と田鶴子さんは心配さうに訊いた。

『否、此髪の毛は此處の建築の時材木を曳く綱に婦人信徒が寄進したのですよ。女の髪の毛には大
象も繋がるのかいつて、髪で撚つた綱は大變丈夫なものださうです。』

『宗教も程度問題だね。斯ういふ事になると官憲の取締を要するよ。』

と團さんは不承知だつた。

『地方から来る善男善女の中には宿賃を踏み倒してもお賽錢を餘計上げたがるのがある。お前達の上けるお賽錢で坊主が道樂をするんだと言つて聞かせれば、生佛様に御道樂をして戴くのなら尙更の事と又財布の口を開ける。始末に負へない。しかし代々の日本人が斯うまで打ち込むでゐるには確かに何かあるんだね。僕等門外漢でも懐かしい氣がするよ。』

『何があるもんか。少しのお賽錢で自然法を自分の都合の好い方へ任せやうといふ横着な料簡があ

るばかりさ。』

第十一回

満員の電車が喧しい警笛を鳴らして頻繁に通る。大阪は郊外生活が東京よりも早く發達した、小川さんが力説したが、成程盛んなものだ。殆ど軒の並んで了つた阪神間は論じるまでもなく、此方側丈けでも斯ういふ風に田園と都會を繋ぐ線路が三四本あると言つた。今此の慌しい鈴實り連中も大阪發展の一縮圖だ。彼等は皆金さへあれば何處も住吉とばかりに巢を郊外に食つて、夜の明けるのを合圖に、ほろい事を探しにワイ／＼押し合つて市内へ繰り込む。

『何うだ？ 何かほろい事おまへんか？』

『此頃てんとあきまへん。何かほろい事おましたら、わたいの仲間へ入れておくなはらんか？』

『時にえいお天氣だんな。あんた、えらお早うおまんな。』

『へえ、ほんまに早うおまつしやろ。お日さんがよう照つてはるさかいこれがほんまの日本晴れだ

つしやろ。時に皆はん變りおまへんか？」

『へえ、わたいともお蔭で皆達者だす。あんたはんとこかて皆達者だつか？ あんたかてほろい事おましたら聞かしておくんははれ。ほんまに頼んまつせ。』

『え、よろしおま。此頃てんとあきまへんけど、あつたら電話かけまつさ。』

といった調子で、大阪會話篇は必ずほろい事で始まつてほろい*弟がるるので、田鶴子さん共々に其處へ引き取つた。三輪さんは辯護士をしてゐる叔父さんの家が



事で終る。随つて全く金の欲しくない人は大阪には居疊まれな。尤も今のところ然ういふ篤志家は滅多にないから、此のほろい事本位の大都會は市内に收容し切れないほど有象無象を惹きつける。小川さんも其の有象か無象の一人だ。

さて、昨日の夕方梅田に着くと、一行は豫定通り散りくになつた。團さんは道修町に御賢

お宿で、

『近いとも、地圖で見ると一寸五分はない。大丈夫だよ。』

とばかりに「左様なら」と言ふのを忘れて行つて了つた。何か忘れ物をしないと気が済まない。それから上方に縁の薄いお父さんと僕に至つては小川さんの案内で又汽車に揺られ電車に乗り換へて此の東天下茶屋のお宅へ厄介になつた。

朝御飯を戴いてから、二階の縁側で鈴實り電車の數に郊外生活の繁昌を卜してゐると、

『坊ちゃん、お電話で△いますよ。田鶴子さんと仰有います。』

と奥さんが取次いで呉れた。直ぐに下りて行つて、

『もしく、田鶴子さんですか？』

とやると、

『はあ。謙さんね？ お早うおます。』

と田鶴子さんが笑つた。別に用件があつたのではない。明日はお目にかゝらないから朝お早うを電話で掛けませうといふ約束を果したに過ぎなかつたが、尙ほ、

「お子さんのあるお家？」

「否、子供の代りに動物がゐます。何だか分る？」

「猫でせう？」

「狎ですよ。狎！」

「然う、此方は大變よ。」

「何がゐるの？」

「子供の事よ。宛然玩具箱を引つくり覆したやうだわ。今朝は最早慣れて了つたけれど、昨日は頭痛がしてよ。」

「然麼に暴れるの。」

「否、だつて何處へ行つても藥の香がするんですもの。家も生藥屋ですけれど、向ふ三軒兩隣り皆生藥屋よ。神田の古本屋よりも激しいわ。全く軒並みよ。道修町つて妙なところでせう？」

「頭痛がしても家が生藥屋なら安心ね。」

「ところが然うでないのよ。お父さんが言つてゐましたわ——此處の家のは飲む藥でなくて賣る藥

だよ。何處か悪いやうなら醫者に見てお貰ひつてね。私、初めて賣藥といふ意味が分つたの。」

といふやうな問答があつた。

二階へ戻つて見ると、お父さんは小川さんを相手に頻りに不器用な社交振りを發揮してゐた。

「然うかね。日曜以外絶対に休日なしと來ちや勤まらない。ナカ／＼慾が深いね。然麼に働いて面白いかい？」

「面白くもないが、仕方がないさ。商買だもの。」

「住友さんの鴻池さんだと金持を様づけにして然も有難さうに言ふところを見ると、最早大分

出來てゐるね？」

「否、一寸出來かけて又新規時直しといふところさ。」

「此頃は儲からないかい？」

「儲かる口もあるが、儲からない口もある。再び渾沌時代さ。」

「戦争では儲けたらうね？」

「其話さ。儲かつたが、丁度其れぐらい又吐き出して了つたから舊の木阿彌さ。」

『昨今は實際不景氣だらうね？』

と宛然訊問の形だ。

『時に、君、家内の目は何うだね？ 餘程出てゐるだらう？』

と少時してから小川さんは話頭を轉じて、質問の方へ廻つた。

『え？』

とお父さんは解し兼ねた。

『僕のところの妻の目さ。』

『細君の目？』

『然うさ。實はバセドウ氏病といふ厄介な奴に罹つてゐるんだが、氣がつかなかつたかい？』

朝鮮

金魚のやうだらう？』

『然う言はれれば成程少し出目過ぎるやうにも思つたが、病氣かね？』

『甲狀腺が腫れて目がダン／＼繰り出して來るゴイトルといふ奴さ。殆んど女に限るところを見る』

と苦勞性の病氣だね。其に家の奴のはヒステリーが大分手傳つてゐる。氣むづかしくて困るよ。』

『其はいけないね。君が餘り苦勞をかけるからぢやないかい？』

『其邊もあつたかと思つて此頃は身を持つ事甚だ謹嚴だよ。さうして萬事御臺所本位で御機嫌を取つてゐる。妻め悉皆増長して了つて宛然女王だね。大きな目をして婆さん染みたところはトランプの女王に能く似てゐるだらう。』

と小川さんは奥さんの棚下しに努めた。何だか何處かでお目にかゝつた顔だと思つたらトランプだつたか。然う言へば成程少し似てゐる。

『壓迫を加へられると見えて酷く反感を持つてゐるね。』

とお父さんもトランプの女王には微笑むだ。

『壓迫されるよ。彼の目にはね。彼れ以上出て來られちや溜まらないから一も二もなく崇め奉つてゐるのさ。』

とところへ當の奥さんが上つて來て、

『何うも失禮致しました。』

と女王に似合はず淑かに挨拶をした。

「噫が出やしなかつたかい？ 今お前の話をしてゐたんだよ。」
と小川さんが言つても、

「他の悪口も結構ですが、其よりは御自分の御用を早くお済ませになつて御案内申上げたら如何で
ムいますか？」

「はい、早速行つて参りませう。しかし何の用だらうなあ、一體？」

「何うせ好い事ぢやありませんよ、警察なんか。」

「警察へ行くのかね？」
とお父さんが驚いた。

「此間から警察から頻りに呼び出しが参るのでムいますよ。忙しいので打棄り放しにして置きました
が、昨日又巡査が見えて、今朝九時過ぎに是非とも出頭するやうにと呉れくも申して行きまし
た。何でムいませうかねえ？」
と奥さんも流石に心配さうだつた。

「何か身に覚えはないかと此奴まで僕を罪人扱ひにするが、これでも未だ警察へ引つ張られるやう

な事はしてゐない。餘り謹直なものだから、或は女房孝行といふ廉で表彰して呉れるのから知れな
いよ。」

「何だらうね、實際？ 盗難品でも出たのかな。」
とお父さんが考へ込むだ。

「最近泥棒に入られた事もなし、入つた事は無論なし、物を拾つた事もなし、落した事もなしと…
…全く良民だから一向見當がつかない。」

と小川さん自らも持て餘してゐた。
「何時までも然魔事を仰有つてゐらつしやるより直ぐお出になつて何をなすつたのか伺つて見る方
が早うムいますわ。」

と奥さんが又促した。

「警察へ自分の操行點を問合せに出頭するのかい？ 坊ちゃんも笑つてゐる。妙な事になつて來
た。これは些つと天王寺行だね。」

「天王寺行つて何だね。」

『天王寺に狂人病院があるのさ。』

『ふうむ、東京なら松澤行だね。然うく、京都は岩倉行だった。大阪は天王寺行か。こいつは面白い。』

とお父さんは早速手帳を出して認めた。狂人には餘程興味を持つてゐるらしい。

『何が面白いもんかね、稀に遊びに来て僕が警察へ呼ばれた事なんか材料に使つちや困るよ。』
と小川さんは間もなく用件を果しに出掛けた。

其後で奥さんは、

『有難うムいます。電氣治療や何やらで昨今は殆んど健康體に戻りました。』

とお父さんのお見舞の言葉に答へて、

『可笑しいんでムいますよ。最初主人は私が呪むと申すのでムいます。私は呪みも何も致しませんのにね。』

と病氣の起り初めから話し出した。

『成程、大將幾分身に暗いところがあつたんですな。』

とお父さんは笑ひながら相槌を打つた。

『然様でムいますよ。其翌晩も亦私が呪むと申すのです。昨夜は自分が悪かつたが、今夜は交際で晩くなつたんだから、然麼に怖い顔をしなないでお呉れと申すのです。けれども其實私は呪むだのも不機嫌だつたのでムいません。』

『面白いですな。』

『今考へて見ますと最早其頃には目が大分出て來てゐたのでムいますね。けれども私も氣がつかず主人も唯呪むくと思ひ込むでゐますから、「お前は此頃は朝から機嫌が悪いね。何か腑に落ちない事でもあるなら腹藏なく言つてお呉れ」と申すのでムいました。さうして終には店が引けると直ぐに歸つて參るやうになりました。お蔭で意見一つ申上げないのに主人の身持が直つたのでムいます。』

『大成功でしたな。』

『けれども同時に私は二階へも上れないほど息切れがするやうになりました。餘り苦しいのでお醫者さまに見て戴きますと、此通りの病氣で、其も最早大分嵩じてゐるとの事でムいました。』

『其はく、しかし小川君が早まつて改悛したのは案外の副産物でしたね。』
『過ちの功名で△いますわね。しかし随分危険な病氣ですから、其ぐるゐの事でもなければ埋め合せがつきませんわ。尤も小川は其が口惜しいと見えて、此頃では何かと申すと謹直を恩に着せませよ。』

『兎に角早くおよろしく結構でした。』

『それでも根治は矢張り困難と見えまして、少し何か心配事がありますと、靦面に相好が變つて、自分ながら恐ろしいやうな顔になるので△いますよ。斯ういふ確かな晴雨計が出来ますと、小川も然うく私に苦勞ばかり掛けられませんわね。』
と言つて奥さんは笑つた。貞女は良人の素行さへ修まれば少々の病氣ぐらゐは苦にならないらしい。

『天王寺は此處から直ぐのやうでしたな？』

と少時してからお父さんが訊いた。

『直ぐで△います。彼處の公園と新世界其にお城と千日前が坊ちやんを連れてお出になるのには一

番よろしう△いませうよ。』

と奥さんは逆さ竹だの飛ばない雀だのといふ天王寺の七不思議からお城の濠の底にある丸石の事を話し始めた。

『……其の大きな丸い石に淀君の亡霊が籠つてゐて今でも時々人を引き込むので△います。御器量の好かつたお方丈けに呼ばれますと随分道心堅固な男でも退つ引きの叶はなくなるやうなそれはく、優しい聲を出すさうで△いますよ。』

『昨今の小川君のやうなら大丈夫でせうがね。』
とお父さんが調子を合はせた。

『何う致しまして、小川などは一聲で眞逆さまに飛び込むで了ふ組で△いますよ。ところが其重役の方は豫ねて此話を承知して居りました。そこで歸宅の晩い時には彼處は通らないで廻り道をする事にしてゐましたのに、主人なぞにも能くあります彼の交際とか申すのが矢張り身



の破滅の因で△いました。或晩の事其交際とかで夜を更かして酒の勢でつい彼處へ差しかゝつたので△いました。』

『一聲で飛び込むで了つたんですね。』

『否、直ぐに逃げ出したので△いました。けれども淀君の聲が腦裡に深く沁み込むで翌朝から發熱致しました。醫者は何かに怯えたのらしいと申す文で治療の方針が立ちません。イヨ／＼息を引き取る間際になつてお濠端で呼ばれた事が分りました。尙ほお濠に縁のないところへ越すやうにと申す其折の遺言に従ひまして遺族の方は其後島の内へ移つたさうで△います。』

それは然うと小川さんは大分待たせた。或は其儘拘留になつて了つたのではなからうかと奥さんの目の爲めに聊か不安を感じ始めた頃、元氣好く歸つて来て、

『や、失敬々々。馬鹿な話さ。』

『何うなさいましたの？』

と奥さんは早速尋ねた。

『でも無事に歸つて来て宜かつたよ。』

とお父さんは冗談を言つた。

『矢つ張り柄にない文學書なんか註文するもんぢやないね、散々油を取られて来たよ。彼奴は巡查部長か知ら？ いやに威張つてゐるやがる。『おいこら』なんて全く罪人扱ひだ。』

と小川さんは憤慨してゐた。

『妙で△いますわね。實業家が文學書を註文しちや悪いので△いませうか？』

と奥さんが聞き咎めた。

『否、其がさ、徳川時代の文學の積りで註文したんだが、案外好くない本でね、まあ詐偽に罹つたやうなものさ。』

と小川さんが頻りに取り繕つてゐるのに、

『徳川時代の何だね——物は？』

とお父さんは一向察しがない。

『去年の事で名は最早忘れて了つたよ。』

『うまく言つてゐるぜ。風俗壞亂だから註文したんだらう？ 何うも當てにならない謹嚴だと思つ

てゐた。

『まあ然麼に言ふなよ。』

『しかし智慧がないね。學術上の参考にするんだと言つて逆捻ぢを食はしてやれば宜かつたのに。巡査なんか無學だから何うにでもなる。』

『ところが突然で何も考へて行かなかつたもんだから、其の無學な巡査に酷く叱られて了つた。忌々しくて仕方がない。』

『真正に不見識な人ね。矢つ張り平常が平常ですから然麼事になるので△いますよ。』
と奥さんはお手のもので、成程最早睨み始めた。

『はい、一言も△いけません。版元が檢舉されたんで申込人の名が知れたんだね。好い面の皮さ。巡査め得意になつて懇々説諭をするから横を向いてゐてやつたら「おい、宜いかね？ ソロソロ頭の禿ける年をしてゐて詰まらないものを買ふんぢやないぜ」と言つて、申込金を返して寄越した。詐偽師の手から良民へ金を取り返して呉れるのは感心したが、頭の批評なんか餘計なお世話ぢやないか。實際失敬な奴だよ。』

と小川さんは又憤慨して、袂の中から紙幣を二枚無造作に掴み出した。さうして、

『此金を受取るにも、生憎認印を持つてゐないと言つたら、拇印を捺して行きなさいだつてさ。僕は拇印なんか捺した事は初めてだ。』

『後日の爲めに指紋を取つて置いたのさ——其となくね。』
とお父さんは決して好い事は言はない。

『これに懲りて些つとお氣をつけなさいませよ。あなたから然麼事ぢや店のものに示しが利きませんわ。さうして此不淨金は私がお預りして置きますよ。』

と奥さんは問題の十圓紙幣二枚を手早く帯の間に納めて、キツと御主人を睨むだ。バセドウ氏はナカ／＼辛辣だ。

『彼の通りで實際困るよ。』

と間もなく小川さんはお父さんと僕を案内して家を出た時に零した。

『困るつて、君が悪いんぢやないか。細君から種々聞かされたぜ。』
とお父さんは同情しなかつた。

『女中や番頭を買収して僕の監視をさせるんだから叶はない。今日も君がたから罰金ぐらゐで事済みになつたんだよ。此間なんか大騒ぎだつたぜ。』

『謹儀の君子チョコク〜尻尾を出すに見えるね?』

『否、今日のやうな退つ引きなら口とは違ふ。全く嫌疑さ。二個連れて生駒の聖天さまへ参詣に出掛けたといふ嫌疑がかつたのさ。』

『二個連れといふと?』

『家内以外の異性、即ち主として藝者だね。然ういふのを連れて一日の清遊をするのが二個連れさ。それから家内、即ち噂同伴でノメ〜出掛けるのが鑄掛連れさ。』

『妙な實語があるんだね。』

『鑄掛連れは別稱鑄掛けて歩くともいふ。夫婦仲の好い鑄掛屋から來た言葉で、差詰め二本棒さ。後生大切に家内のお供をして歩くんだから藝のない野暮天の骨頂だよ。然るに二個連れは社會的勢力の表象で、大阪紳士の理想といつても過言でない。』

『馬鹿に力瘤を入れるぜ。其が悪いんだよ。矢つ張り子供がないと何時までも呑氣でいけない。』

ツロノ、頭の禿ける年をしてるて。』

『何彼と言ふと頭が問題になる。然麼に薄くなつたかなあ。』

と小川さんは慨歎して、

『ところで何處へ行くんだね。』

と甚だ覺束ない案内者だ。

『何處でも宜いさ。大阪らしい氣分さへ味へればね。』

と此方にも別段の註文がない。

西門前で下りて直ぐに天王寺へ折れ込む。流石に大日本佛法最初といふ折紙つき丈けあつて平常でも縁日のやうな賑かさだ。石川縣熊美郡清水村の出身地を蜻蛉笠に被つた男が、

『俺等が郷里では縣税を一圓十三錢出せば漁り放題ですから、大負けにして上げます。一本四十八錢のところ三十錢ちや。實に利くものですよ。なう。千切りにして味噌汁に入れる。身が溶けて油丈けになる。』

と烏目の薬の八目鰻を賣つてゐると思へば、其向ひには、

「……次の食が直ぐ進む。咳なら二日目まで止まる。婦人病には猿の頭が利くが、これも利く。他で

は二圓五十錢ですが、此處では一圓五十錢……」

と蝮蛇屋が蝮蛇局を巻いてゐる。すべて大阪では廉くて利きが早いとなれば蛇や鰻の干物が斯ういふ靈場でも賣れる。

此處へ來たら五重の塔へ登るものだとなつて、埃だらけの材木の間を息の切れるほど攀ち潜つた末、天邊から花盛りと煤煙に鬱陶しさうな大都會を見渡した。

「謙一や、危いよ。」

と險難性のお父さんが注意した。

「大丈夫だよ。金網が張つてある——時々命の惜しくない連中が此處から飛び下り自殺をやるんでね。」

と小川さんが説明した。



龜の池だの大鐘だのを見て西門へ戻つた時、

「合邦が辻は此近所だらうね。」

とお父さんが訊いた。

「此の直ぐ彼方だよ。しかし妙なところを知つてゐるね。」

「西門通り一筋に……と義太夫の文句で思ひ出したのさ。」

「義太夫が分るのかい？　これは話せる。」

と小川さんは喜んで、

「生憎と文樂座が開いてゐないから……」

「休みかい？」

「休みだから今夜僕が語つて聞かせよう。合邦は殊に得意だよ。」

「何時頃から習ひ始めたんだい？」

「去年からさ。津太夫張りで遊いぜ。」

「未熟の果物と生水は道中特に横むやうに言はれて來たんでね。」

「酷い事を言やがる。しかし合邦が辻を見やうか？　閻魔堂が残つてゐるよ。」

『まめ舍さうよ。後が怖いからね。』

とお父さんは唯々小川さんの淨瑠璃を恐れた。

又電車に乗つてお城へ向つた時、

『途中に高津の宮があるけれども、民の籠は今塔の上から見ただけだから最早宜いだらう。』
と小川さんは無精を言つた。

『宜いとも。しかし込むねえ、此方の電車も。』

『込むとも、東京のよりも込む。東京よりも賑かだと言ふと妙だけれど實際此地の方が人口稠密だからね。往來が雑踏するんで市内電車にしても東京見たいに鈴ぐらるでは人が避けられないから、そらポーッ〜と空氣ラッパを使つてゐる。』

『矢つ張り其丈け鈍感なんだらうね、人間が。』
とお父さんはソロソロ悪口を言ひ始めた。

大阪城へは石を見に行つたやうなものだつた。尤も目ほしいものは大抵焼けて了つて、場所によつては其石さへ焦けてゐるといふ始末だ。門に入るのを待ち構へて、

『大きいだらう！』

と小川さんが石垣の石を自分のものゝやうに紹介すると、

『大きなもんだね、實際。何うして持つて來たらう？— 這に大きなのを。』

とお父さんが感服する。間もなく又素晴らしいのに行き當つて、

『此方が振袖石、振袖の形をしてゐる。彼方が蛸石。そら、下の隅のところに蛸の形の斑點。よいと旦那、此石は振袖に似てゐるわね。あ、私、何うしても朝鮮人參を飲むでもう一週振袖を着



＊がでてゐるだらう。』
と小川さんが説明する。

成程、振袖石が高さ二間半餘横七間半、蛸石が高さ四間半横六間とある。』

とお父さんは立札を読むで、
『昔の軍人も案外話せるね。蛸石といふと何となく瓢逸だ。振袖石なんて如何にも優長な名前ぢやないか？』

『淀君がつけたんだらうぜ。ち

る年頃、若返りしたいわ。朝鮮征伐をしてよう。ようつてば、よう、旦那……てな次第でね。』

『旦那ぢやなからう。』
『それなら閣下か。あら、閣下、何んていけ好かないんでせうね。此石の斑點は坊主でせうか？
あら、蛸だわ！ ねえ、ちよいと、閣下つてば……かね？』

『閣下ぢやない。』

『殿下か？ 太閤は。ちよいと殿下……』

と言ひかけた刹那、ズドーンといふ大物音。

『……えつ、吃驚した。午砲だよ。』

お城から天神橋まで歩いて、橋の中途から中之島公園へ下りた。此處は有り合せの地面を利用したのでなく、川の中流を埋めて拵へたのだから、廣くなくても贅澤は言へないのださうだ。尙ほ小川さんは、

『坊ちやん、此公園は餘程進歩してゐますよ。男の子の遊ぶところと女の子の遊ぶところが別々になつてゐますからね。』

と兩方へ案内して呉れた。

『風儀の悪いところでは子供の時から此れぐらゐ嚴重にして置く必要があるんだらうね。』

とお父さんが言つた。

『風儀が悪いと何うして斷定するんだい？』

『二個連れとかで出掛けるのが理想だと言つたぢやないか？』

『其は紳士の場合さ。大阪にだつて教育家はあるぜ。』

と小川さんは教育家は紳士でないと思つてゐる。

『風儀は教育家に一任して、紳士は一意専心ほろい事をするんだね。』

『まあ然うさ。此地は何でも分業だ。先刻通つた谷町が洋服屋、松屋町が駄菓子屋、それから會社

銀行は此の向ふの高麗橋通、呉服太物なら本町通といふやうな次第でね。』

『美人は宗右衛門町、金持は船場と島の内かい？』

『然う〜。』

『しかし案外美人の少ないところだね。さうして出つ齒の女が多いと聞いたが眞正だ。』

とお父さんは草臥れたと見えて容易に立たうとしない。

「誰に聞いたんだい？ 妻だらう？」

「然うさ。しかし齒科醫の説だと言つたぜ。」

「家内の事ばかり言ふと家内を恐れてゐるやうに誤解されるかも知れないが、實は先月一軒置いて隣家へ圍ひものが越して來たのさ。此奴が生粹の大坂美人だから、僕が始終然う言つて褒めると、家内は躍起になつて、美人には美人だけれど出つ齒だと難癖をつける。女は他の女の綺麗なものには餘り同情しないね。」

「美人だけれど出つ齒だといふのは矛盾ぢやないか。」

「其が矛盾ぢやないんだよ。女といふものは皆自分は兎に角美人だと確信してゐるんだからね。家内などは自分は美人だけれども少し目が出て年が寄つてゐるくらゐに思つてゐるらしい。それだから美人だけれども出つ齒だと言つても些つとも矛盾を感じない。」

「面白い觀察だね。」

「自分は美人だけれど少し器量が悪いと思つてゐるところに安心立命がある。それでこそ鏡屋が立

ち行くといふものさ。」

「彼處へ子供を連れて來る奥さんも美人と思つてゐるんだらうね？」

「然うさね。美人だけれど少し鼻が低い代りに額が高いと確信してゐるんだらう。然もなくして那樣白粉をコテく塗る理由はない。」

と公園で通行の婦人の品定めをするところは正に不良中年だ。

さて、中之島では御自慢の公會堂と市廳を拜見して四ツ橋で下りた。大阪は川と橋の都ださうだが、殊に此處は川が十文字に打つ違ひ橋が四つ向き合つて特徴を發揮してゐる。

「何だい？ 涼しさに四ツ橋を四つ渡りけり……か。這麼ものが此處にあつたかなあ？」

と小川さんは來山の句碑を見詰めて、

「四ツ橋を四つといふと四々十六度渡つた勘定になるね。悉皆で。」

「否、つい四つ皆渡つて了つたといふ丈けの意味さ。」

とお父さんが解釋した。

「それぢや當然で發句に讀むほどの事もない。何うも僕には發句は分らない。」

『兩方に鬚があるなり猫の戀……なら分るだらう？ 矢つ張り來山だよ。』

『それなら分る。兩方に鬚があるなり……か。成程、面白い。猫は確かに牡でも鬚がある。』

『恐れ入ります。』

間もなく心齋橋へ出て賑かな通を歩き始めた。

『實際人口稠密だらう？ 此筋が大阪では代表的さ。昔のまゝだから少し狭いけれどもね。』

と小川さんが紹介した。

『成程、人出は銀座や日本橋以上だ。此筋だね、榊原君の親爺様が若い時夏帽子を買つて翻然と基督教に歸依したのは？』

とお父さんが言つた。

『榊原の親爺が何うしたんだい？』

『餘程閑だつたと見えて夏帽子を一つ買ふのに心齋橋筋の唐物屋を端から端まで冷かして歩いたんださうだ。何軒訊いても要するに値段は大同小異だつたが、一番始めの店のが矢つ張り一番好いや』

うに思へたので、又引き返して行つて其を買つたんださうだ。さうして其間一年來の信仰問題が頭

の中で最早美事解決出來てゐたといふから面白いのさ。』

『帽子と宗教と關係があるのかね？』

『大にあつたのさ。宗教も要するに大同小異——唐物屋は軒並にあつても問屋は共通だと先づ大悟徹底したんだね。して見れば初めから多少聞き覚えのある基督教が一番手つ取り早いといふ次第で洗禮を志願したのさ。』

『ふうん、洒脱な親爺だね。すると榊原君がアメリカまで神學專攻に出掛けたのも其夏帽子の影響だね。』

『それだから大に關係があると言ふのさ。現に彼の男が傳道をやつてゐるのも其麥藁帽子のお蔭だよ。』

『若し割引の店でもあつたら親爺め其處で買つて了つて、矢つ張り日本人は佛教の方が好いなんて言ひ出したかも知れない。危いところだ。』



『そこさ。榊原君は心齋橋の唐物屋が一軒として割引もせず懸値も言はなかつたのを今もつて感謝してゐるだらうよ。』

『宗教も商取引も大同小異だね。妙な事が縁になるもんだ。』

と二人は何時までも他愛もない事を論じてゐる。尙ほ話によると此親爺さんといふのは現に堺市指折りの成功者ださうだ。さうして或日息子の一人が木から落ちて腕を挫いた時、其を此子には手の仕事よりも頭の仕事をさせろといふ神さまの思召と解し、本人を諭して今日ある通り傳道師になる決心をさせたとある。身を傳道に捧げてゐる以上は或は多少社會を教化しないとも限らない。斯うなつて來ると一個の麥藁帽子も其影響の及ぶところ實際廣い。

然う歩きもしないが兎に角立ち詰めだつたから道頓堀で休むだ時は寛いだ。

『坊ちゃん、お腹が空いたでせう？ しかし川料理は此柴藤に限るんでね。』

と小川さんは僕とお父さんに振り分けに言つた。

『舟半家半だね、此座敷は。惜しい事に水が汚い。』

とお父さんは窓から顔を出した。

『風流といふよりも實利が主意さ。此邊は殊に土一升金一升だから川でも利用しなくちやね。何しろ筋向ひが宗右衛門町、背後が九郎右衛門町に難波新地と來てゐる。君、此邊の夜景に親しまなくちや高級の大阪趣味は分らないよ。』

と小川さんが力説した。

『低級は什麼のだい？』

『低級娯樂で満足するなら此道頓堀には芝居小屋が並んでゐるし、背中合せの千日前には樂天地なんていふ興行物のデパートメント・ストアがある。低級高級ともに此邊が大阪趣味の中心地だね。』

『君は何方だね？ 高級らしいね。』

『家内には低級に見せかけて芝居なぞへも僕の方から言ひ出して連れて行く。鴈治郎なんて凸助は嫌ひだけれど、矢つ張り紙治は大文字屋が天下第一品だねなぞと調子を合せる。しかしこれは策だよ。商賣をしてゐると儲かれば景氣がつくし損をすれば自棄になるし、仕方がないさ。自然極内で高級の方へも足を踏み込む。』

『矢つ張り監視を受ける丈けの事はしてゐるんだね。君は若い時分から狂ひ水が好きだつたからな

あ。

とお父さんは言つたが、少時してから其狂水を勧められるまゝにチビく、嘗めながら、

『成程、算盤が置いてある。此方の人は勘定高いから、喰べながらも是で當つて見て心靜かに勘定の來るのを覺悟するんだつてね？』

と思ひ出したやうに尋ねた。

『其は悪口だよ。此方では商談は大抵斯ういふところか尙一層高級なところでやる。白面ぢや然う／＼思ひ通りの事は言へない。そこは狂ひ水の功德、難有いものさ。取引は喧嘩と同じで大概酒の上だからね。随つて算盤が座右の銘さ。家内などは這般の消心に通じない悲しさ、良人が一生懸命に算盤玉を弾いて公明正大の商賣取引をしてゐるのに角を生やす。實際女子と小人養ひ難しだよ。』

と小川さんは算盤の説明と一緒に自分の立場を辯明した。

『細君が餘程苦手と見えるね。』

とお父さんが笑ふと、

『否、苦手の事はない。』

と小川さんは強く言つて、

『唯彼の目が怖いんでね。病勢を昂進させまいと思つて肝膽を砕いてゐるのさ。今夜だつて一杯食はせやうと思へば困難はない。例へば君は坊ちやんを連れてこれから家へ歸る。さうして「小川さんは店へお寄りになつたら若松から取引先の主人が來てゐましたので今夜は晩くなるさうです」と言ふ。何うも少し拙いね。斯うしやう。此處から店へ電話をかけて小僧を呼んで君達を送らせる。さうして小僧に言はせる方が安全だ。ところが當の小川さんは商用でも何でもなく此處でチビりくやりながら待つてゐる。君は小僧のゐる中に急に思ひついたやうに、「御主人のお留守の間に一二軒友人を訪問して参りませう。來たのが知れて後から恨まれると困りますから」と言ひ出す。形式的訪問なら子供を連れて行かないからね。すると家内はまさか君が嘘を吐くとは思はないから、「お獨りでお分りになりませうか？」と心配して、「丁度好いわ。清吉、お前御案内申上げなさい」と來る。巧いだらう？ 斯ういふ具合で君は坊ちやんを家へ置いて又小僧に連れられて此處へ引き返す。殘餘は最早占めたもんだ。僕が好いところを知つてゐるから早速其處へしけ込むで、ドンチャン騒ぎなりしんね、こなり百事意の如しさ。』

「ナカ〜悪智恵があるんだね。」



るんだから内に寝てゐる筈はない。續いて「然うかい。其にしても晚いね。奴さん哲學者だから道

「これぐらゐに立ち廻らないと息抜きは出来ない。十二時まで遊んでゐても大丈夫だよ。自動車で急げば十分で家へ着く。しかし家へ着いてからが大切だ。二人一緒に入ると直ぐに感づかれて了ふ。君が先に入つて僕が外に待つてゐる。否、僕が先の方が手順が宜い。」

「泥棒でもするやうだ。」

「嘘をつくんだから一種の泥棒には相違ない。家内は「お晩う△いましたね？」と睨むに定つてゐる。怖いから見ないやうにして「何時だね？ 晩くまで引つ張られて、ああ、肩が凝つた」と言ふ。「もう十二時半で△いますよ」と來る。「それぢや村岡君は最早寝たらうね？」と受け流す。外で待つてゐる

でも間違へたのか知ら？」と心配さうに言ふ。斯ういふ場合に嫌疑のかゝらないやうにと思つて、

家内には君を世間の事は東も西も分らない哲學者だと紹介してある。用意周到なものだらう？。そこへ君が「や、唯今」とか何とかと言つて平氣な顔をして入つて來る。「何うしたんだい？ 這處に

晚くなつて？」と僕が咎める。「下りるところを忘れて了つて住吉まで行つたんだよ。それから一停留場毎に下りて探して來たもんだから這處に晚くなつた。もうソロ〜九時だらうね？」と答へる。

「こいつは大笑だ。もう九時だらうは宜かつたね。何うだい、美代子？ 矢つ張り哲學者といふものは時間と空間に超越してゐるだらう」と僕がゲラ〜笑ふ。君も笑ふ。家内も笑はざるを得ないやね。否應なしに笑はして了ふんだ。尤もこれには坊ちゃんも小僧を豫め買収して置く必要がある。僕は小僧の買収費が毎月大分かゝるよ。」

「随分人知れぬ苦勞があると見えるね。」

とお父さんが笑ふと、

「苦勞の多い丈け樂みさ。冗談は兎に角、此寸法を一つ實地問題にしやうぢやないか？ 稀に來たんだから宜いだらう？」

と小川さんは返答によつては理論を應用する積りらしかつた。

「御免だよ。僕は高級趣味は分らない。」

「話せないね。」

御飯が出るまでに小川さんは幾度もお酒を命じて大分赤くなつた。酔ふに連れて益々氣焔が高まる。眼中最早奥さんなした。

「時に君、然麼に飲むでも宜いのかい？」

とお父さんはソロ／＼案じ始めた。

「宜いさ。酒丈けなら何等の掣肘も受けない。」

「いやさ、少し呂律が怪しくなつて来たからさ。」

「大丈夫だよ。僕は少し酔つてゐる方が能く語れるんだから安心して給へ。」

と小川さんは家へ歸つて義太夫を聞かせる料簡と見えた。

千日前は流石に昔からの遊樂地丈けあつて京都の新京極を凌ぐ盛況だつたが、案内者が高級だから悉皆素通りをしてしつた。播重座の前ではお父さんが足を止めて、

「大阪へ来て義太夫を聞かないで了ふのは残念だね。」

と言つた。しかし小川さんは、

「此處のは女太夫ばかりだからね。」

と答へた丈けで問題にしなかつた。

樂天地の前では今度は僕が立ち止まつた。小川さんは温良の君子で決して僕の存在を無視しな

い。先刻も單に理論としていただけれど僕の處分法に關する研究の結果を發表したくらる僕に重きを置

いてゐる。そこで早速僕の方へ摺り寄つて来て、

「坊ちゃん、新世界の方が此處よりも大規模です。大阪中の見える通天閣といふ素晴らしい塔があ

ります。今夜家内が坊ちゃんを御案内すると言つてゐましたよ。」

と條件をつけて急ぎ立てた。

「宜いさ、寶塚へ行けば少女歌劇を見るんだもの。」

とお父さんも言つた。

又電車に乗つて歸る途中、

「君、此處だよ。合邦が辻園魔堂と書いてある。」

と小川さんは窓から指さして、

「君は合邦と寺小屋と何方が好きだい。」

「壓迫的に来るね。何方が短いかな？ まあ何方でも得意の方を聞かうよ。」

とお父さんは諦めをつけた。

「両方得意だ。」

「恐れ入るね。」

家へ着くと間もなくお父さんは、

「謙一や、お前一つ三輪さんへ電話をかけて見てお呉れ。」

と僕に頼む。小川さんの浄瑠璃を聞くので急に心細くなつたのかも知れない。

「何とかかけますか？」

と僕が太郎冠者どころを勤めると、

「別に用もないが、お晝前に何とかいふところで自動車に弾ね飛ばされた人があつたね。お前も電

車の中から見てるたらう？ 何うも様子が三輪君に似てるたから気がかりでならない。」

秘書役は手帳を繰つて早速電話口に立ち、番號を呼び出して訊いて見ると、

「へえ、東京の三輪さんだつつか？」

「然うです。御丈夫ですか？」

「へえ？ もしく〜」

「お變りありませんか？」

「へえ、お變りおまへん。東京の三輪さんだつしやろ？」

「自動車に轢かれやしませんか？」

「一體あんたはん何誰や？」

と稍怒つた聲がした。

もう間もなく下ノ關だと聞くと三輪さんは早手廻しにハンチングを麥藁帽子に被り替へたのは宜かつたが、忽ち其を窓から吹き飛ばされて了つた。

「惜しい事をしたね、折角のタスカンを！」とお父さんが同情した。同時に半ば立ち上つたのは或は三輪さんが前後を忘却して飛び出すかも知れないと懸念したらしい。しかし御本人は、

「否、惜しい事はない。お蔭で壽命が又一年延びたやうなものだ。」と答へて泰然たるものだった。

「相變らず妙な事を口走るね。」と團さんは退屈まぎれに冷かした。

「でも僕は毎年夏帽子を一つしか被らないからね。」

「頭が二つあれば格別、一つしかない限り二つは被れないよ。」

「否、一夏に一つといふ意味さ。君だつて然うだらう？」

「其は然うさ。それなら初めから然う言へは宜い。」

「理屈つほい男だ。そこで夏帽子を買ふ度に僕は感慨無量なものがある。」

「買つて貰ふ度にだらう？」

「一々咎めるね。妻が買つて來ても金は僕が出すんだから何方

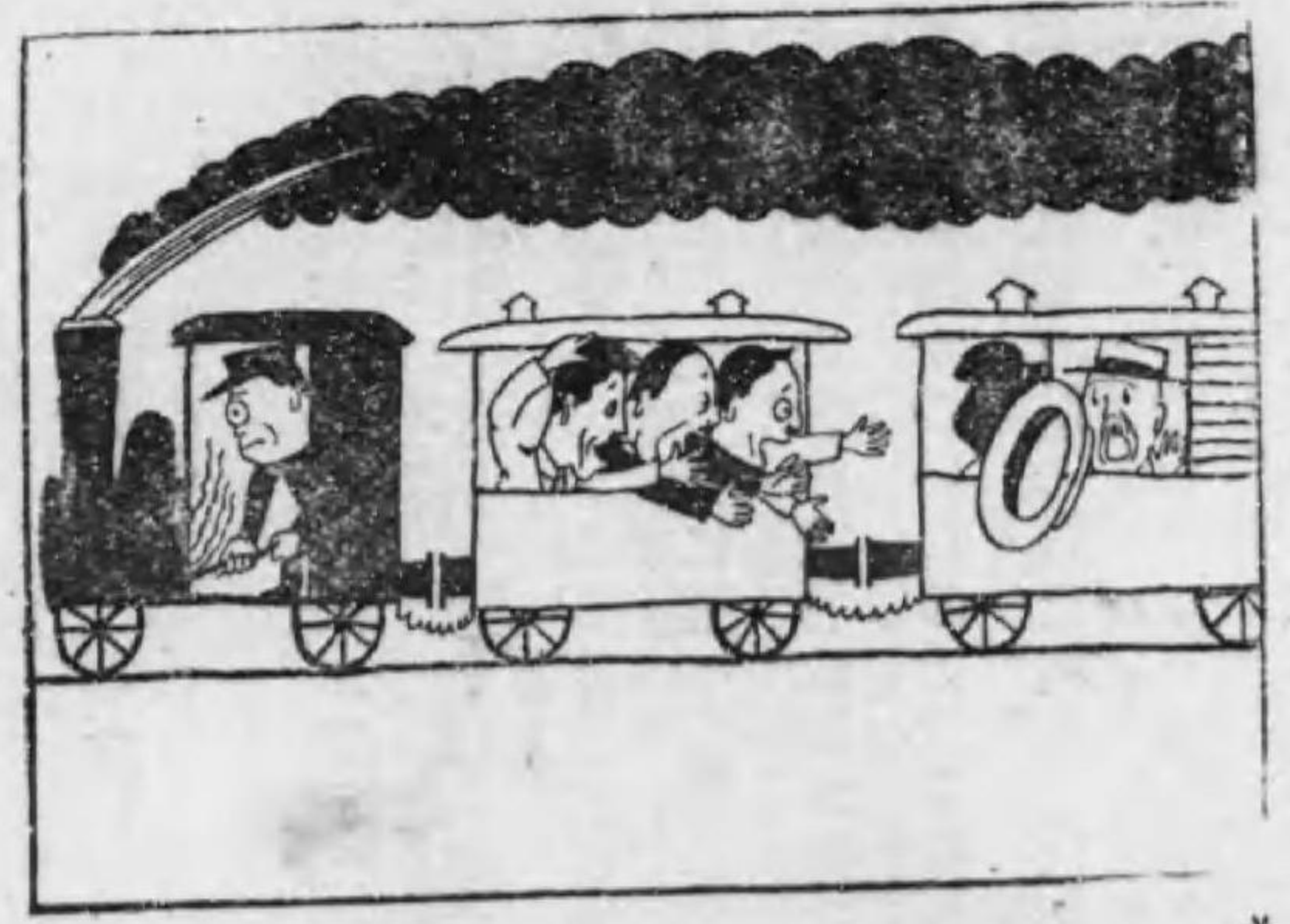
にしても同じ事さ。毎年一つと定めて置くと、これから被る夏

帽子の數とこれから生きる年の數と同じ事になる。」

「數の觀念がない筈だが、案外あるね。」

「大にあるさ。昔から相場通り人生五十と假定すると正當な*

るよ。」



「夏帽子は後九つしか被れない事まで勘定が出来てゐる。後九つとは考へて見ると心細いちや

ないか？ ところが、今年はこの旅行の爲めに二度目を買ひ、其

を今飛ばして了つたから、又一

つ買へる。それで少くとも夏帽

子といふ問題だけでは二年壽命

が延びたも同じ事になるだらう？ 最も有效な若返り法は旅

行だといふ君の説も案外一理あ

「恐れ入つた。帽子を吹き飛ばされて氣焰を吐いてゐれば世話はない。」

「面白いね。汝の夏帽子數へらる。僕は後十か。冗談ぢやないぜ。」

とお父さんは此問答を聞いて嘆息した。

大阪から下ノ關とは三輪さんの帽子諸共旅程が急に飛ぶやうだが、僕は前回の僕達でなくて又東京から出直して来た僕達だ。春の旅行は僕の爲めに大阪でさ、はうさになつて了つた。まさか小川さんの義太夫に中てられたのでもあるまいが、丁度彼の晩から熱が出て數日寢込むだ。三輪さんの面倒を見てやるどころか東京驛で三輪さんに迎へて貰ふやうな始末、殊に小川さん御夫婦には一方ならぬ御迷惑をかけた。それで今度の九州旅行にはお供の出來た義理ではないのだが、病源の扁桃腺肥大を取除いて最早大丈夫と保證がついたので、又候田鶴子さんの相役を承つて罷り出た。朝特急で東京を立つと春の旅行で見知り越しの土地丈けは日のある中を通り、神戸邊から寢て目が覺めると既に下ノ關に近い。暗の間に走つた中國筋は先づ九州を一周してから歸途にゆつくり拜見といふ寸法。團さんの設計は例によつて無駄がない。今度はナカノの長道中だ。それで一日々々家へ遠くなると三輪さんが家郷病になるかも知れないから、一應目的地へ蔘進して、數泊後

には一日一日と家へ近くなるといふ考案も入つてゐる。

「此前は君達が物見高い顔をしてゐた所爲か俵屋と自動車屋に大分食られたぜ。今度は兎に角餘り田舎漢視されないやうに氣をつける事だよ。」

と團さんは何かの序に注意した。

「中國や九州へ来て田舎漢扱ひをされる次第もなからうぢやないか。」

とお父さんは服さなかつた。

「否、其がナカノ、然うぢやないんだよ。住めば都だからね。中國でも九州でも皆自分のところが世界の中心だと思つてゐる。彼處に田の草を取つてゐる百姓でも太陽は毎朝自分の家の背戸を照らす爲めに東から昇ると信じてゐるぜ。」

「さうして晩酌をやるやうに西に没して呉れると君は信じてゐるんだらう。」

と三輪さんは今しがたの竹籠返しをした。

「然うさ、自分の家内ばかりが女だと信じてゐる人もある。兎に角自分の周圍が世界の中心なんだから、他所の人は中央の消息に通じない田舎漢さ。例へば下ノ關で大阪屋を知らないと言つて見

給へ。撲られないまでも文明人としては扱はれないよ。」

「大阪屋つてのは何だい？」

「下ノ關文化生活の中心さ。」

「三輪君、うつかり乗つちやいけないよ。」

とお父さんが警戒した。

「兎に角東京から来たから敬意を表して食らんだと思つてゐると大間違だぜ。」

「食られたり馬鹿にされたりしたんぢや間尺に合はないね。」

と三輪さんは共鳴した。

「しかし安心し給へ。今度は自動車へでも伸へでも土地の相場で乗つて見せる。金は惜しくないが、田舎漢に付け込まれるのは業腹だからね。」

と團さんは何か工夫のあるやうに言つた。

漸く下ノ關に着いた時、田鶴子さんと僕は例によつて家への通信を果した。未だ何處も見物しないから至つて簡単だ。それでも田鶴子さんには、



「……二十四時間も乗り続けると紳士淑女が遺憾なく動物性を現します。寢通しの人もあれば喰へ通しの人もあります。列車全體が動物園で客車が一個々々檻のやうな観があります。檻ですからボイさんが掃際に來る度に必ず喰べ粕が一杯溜まつてゐます。さしうて動物ですから、掃除の都合の好いやうにナカク退いてやらないのや浮かり足に觸ると唸るのがあります。」

といふやうな事が書いてあつた。

驛前で伸に乗つて少時走つてから團さんは、

「此邊は一向變つてゐないね。」

と伸屋に話しかけた。

「へい、變りません。」

と伸屋が答へた。

「市長は評判が好いかね？」

「へえ、李家さんですか？」

「然うさ。李家君さ。」

「好いのやら悪いのやら私共には市長さんの評判は分りませんわ。」

「寄らないで行くと後で怒るかも知れないが、此通り同伴があるから仕方がない。それから警察署長は矢つ張り以前の男がやつてゐるだらうね？」

「はい、やつてをられます。」

「彼の男も年を取つたらうね？」

「はい、取りました。」

至つて無難な問答だ。年を取らない奴はありつこない。而も傍で聞いてゐると、團さんが以前此土地に住むでゐたやうに受け取られる。其中に俵屋は、

「御承知で△いませうが、此處が日清談判の春帆樓で△います。」

と狭い道の左側を指さした。石段に門構へは宿屋兼料理屋に似つかぬ厳しさだ。

「成程、此處だつたね。此處へは能く河豚を喰べに來たものさ。」

と團さんは昔懐しさうに言つた。

「春帆樓だとさ、これが。講和談判を料理屋でやるところは所謂樽俎折衝で如何にも東洋風だね。」

とお父さんは後方の俵の三輪さんに紹介した。

「河豚は何うしても下ノ關さ。チリで一杯と來たら溜まらないからね。」

と團さんは土地通を續けた。

「結構なもので△います。第一酒の廻りが違ひますからな。」

と俵屋が受けた。

「故郷忘じ難しで、一つ喰べて行くかな、久しぶりで。」

「唯今は駄目で△います。」

「休業かい？」

「否、夏の河豚は中りますから一切喰べません。」

「然うかね。成程、然う〜。然うだつたね。久しく來なかつたものだから、つひ……」

と團さんは危く馬脚を露すところだつた。

赤間宮で下りた時、田鶴子さんは、

「謙さん、好いものを見せて上げませうか？」

と言つて、ポケットから小さな蟹の乾し固めたのを出した。

「平家蟹でせう？ 何うしたの？ 買ったの？」
と僕が欲しさうにすると、

「あなたのも買つて来てよ。」

と一疋呉れた。名前を連ねて書く場合のやうに順次不同といふ奴で乗つて来たものだから、殿後を勤めてゐた田鶴子さんは何時の間にか俵を止めて買物をしたのだつた。

「似てゐるなあ！ 全く能く似てゐる。蟹二つだ。」
「何誰に？」

「僕の方の生徒監督に。」

「まあ！ 先生に蟹二つなの？ 謙さんもナカク、お口が悪いわね。」

「だつて平家蟹つて緋名がついてゐるんですもの。これは参考の爲めに是非持つて歸ります。」

「あなたのは男よ。」 女でも矢つ張り怖い顔をしてゐるんですね。」

「顔ぢやないわ。甲羅だわ。」

境内には壇の浦に沈むだ平家一門の墓があつた。大木の下に小さな自然石の立ち並んだ様は如何にも没落した人達の奥津城らしく、何とはなしに哀れを誘ふ。

「錨を背負つて飛び込むだ知盛までゐるね。死體搜索の結果不思議にも大將株の丈けが揚つたと見える。」

とお父さんは立札を仰ぎなが
ね。大變賑かだつたが、此頃でも盛んだらうね。」



* と言つた。

「雑兵は皆海の底に居残つて蟹になつて了つたのさ。負け戦さには實際雑兵で出るもんぢやないね。」

と團さんは平家蟹に同情した。

「墓ないものは、雑兵の身かね。田鶴子さん、其蟹をもう一遍見せて御覧なさい。」
と三輪さんが言つた。

「此處のお祭典は何時だつたか

と團さんは名譽恢復を心掛けて安全な質問をした。神社には必ずお祭典がある。さうしてお祭典は大抵賑かなものに定つてゐる。

「四月の二十三日で△います。女郎の参拜といふのがありまして、これは福岡邊からは素より京阪から見物に参ります。」

と俵屋が答へた。團さんの俵屋が一番辯者で、他の連中は脚が本業だと言はないばかりの顔をしてゐる。

「然うく、彼は他に類がないね。」

「全く此處ばかりで△います。」

「下ノ關中のが皆参詣に出るのかね。」

とお父さんが訊いた。

「否、たつた五人です。一番の流行兒が選ばれて此處まで練つて來るのです。斯ういふ具合に若い衆が後方から日傘を翳しかけてな。綺麗な禿が供をしましてな。何しろ一人の衣裳が何千圓といふのですから、見答へがありますよ。」

「花魁道中見たいなものだね。」

「否、然麼ものぢや△いません。矢つ張り女郎の参拜です。生き残つた平家の女子達が今の稻荷町の基を開いたといふので昔からの爲來りです。」

間もなく町を通り抜けて壇ノ浦へ出た。海があるばかりで、他には何も無い。

「此處こそ些つとも變らないね。」

と團さんは安心して言ふ事が出来た。

「何も△いませんが、これが御堂川です。」

と團さんの俵屋が、溝ぐらゐの小川を指さした。

「成程。」

「旦那は平家の一杯水の謂はれを御存知でせうな。」

「さあね、聞いたやうな氣もするが、長らく洋行してゐたもんだから、日本の事は箸の持ち方まで忘れて了つたよ。」

「此川と海の境際に井戸がありまして、其處で平家の旦那方が末期の水を一杯宛召し上つたのださ

うで△います。それからといふもの其井戸の水に不思議が起りました。何人が飲むでも初めの一口は清水ですが、二口目から鹽水になると申すので△います。』
『成程、平家の一杯水か。然う言はれ、ば聞いたやうだね。何しろ此處で皆沈むで了つたんだから浮ばれないのさ。昔は雨の晩に此邊へ鬼火が出たもんだなんて事を君達の爺さん連中は言つてゐるだらう。』

と團さんが言つた。

『矢つ張り御存知ですな。』

と仲屋はつひ口仲に乗つたが、

『旦那方は廣島で△いますか？』

『まあ其邊さ。』

『これから朝鮮へお歸りになりますね？』

『これも圖星だ。』

門司へは豫定の刻限に渡つた。狭い海峡を一つ距てゝゐる丈けだから本土と異るところは些つと

もないが、宿引のやうな男が寄り添つて、

『大連へいらつしやいますか？』

と訊いたのには、成程遠方へ来たといふ感じがした。停車場の二階で晝食を認めた。

『何うだつたね？ 俵賃は安かつたかね？』

とお父さんは喰べながら思ひ出したやうに尋ねた。

『否、安くもなかつたが、先づ土地相場だらう。』

と團さんは答へた。

『多少有效だつたね。』

『那麼に嘘を吐いて漸く土地相場ぢや割に合はない。』

と三輪さんは無料で乗る積りらしかつた。

『高い安いは兎に角田舎漢扱ひを受けなかつたからね。』

と團さんは主張した。

『田舎漢扱ひさ。廣島縣人といふ判決ぢやないか？ ねえ、村岡君。』

「然うとも、さうして朝鮮へ出稼ぎと來てゐる。難有い仕合せさ。これちや無料で乗つて少しお剩錢を貰つても餘り好い心持はしないね。」

「馬鹿ばかり言つてゐるよ。自分の土地が世界の中心だからね、隣縣と見て呉れたのは絶大の好意だぜ。君達は世間を知らないから分るまいが、朝鮮へ行つて産を爲してゐるのは主として山口縣人と對州人だ。此故に下ノ關で朝鮮へお歸りかと訊くのは彼地で成功してゐるといふ意味で、これも最大の敬意さ。土地相場でこれぐらゐの優遇を受ければ又以つて瞑すべしぢやないか。」

「斯ういふ人に會つちや敵はない。自分の頭が世界の中心だからね。骨を折つて田舎漢扱ひにされて、多大の優遇を受けたと思つてゐれば天下泰平さ。」とお父さんが笑つた。

門司では何も見なかつた。驛前に五六軒並んだ果物屋の假店が一寸異國風で注意を惹いた。汽車に乗り込むと、ビール樽のやうな紳士が、

「やあ！」
と言つて立ち上つた。

「やあ！」

と應じてお父さんが寄り進むだ。

「これはお珍らしい。一體何方へ？」

「悪い事は出来ませんな。何うせ寄れないからと思つて無斷乗り越しといふ積りでしたが……。」

「それは酷い。まあお掛け。」

「まあ〜。」

と二人は挨拶に移つた。

此のビール樽はお父さんの従姉の配偶で、川島さんといふ若松の石炭商だつた。お父さんは一同に然るべく紹介を濟ませてから、

「偶然も斯うなると神祕に屬しますね。九州で親戚といつてはあなたのところ一軒きりなのに、其あなたと此玄關口でピッタリ行き當るのですもの。」

「私も門司へは滅多に來ないのですが、今日は全く偶然でした。矢つ張り神さまのお引き合せです。此上寄つて行かないと罰が中りますぞ。冗談は兎に角何うですか？」

と川島さんは早速誘ひをかけた。しかしお父さんは豫定があるので何うも動きが取れず、百方陳謝して歸途には屹度都合をつけると約束した。川島さんは是に納得して、幸ひ今日は山まで行く用があるからと落ちついて話し始めた。

『何でせう、彼は？』

と田鶴子さんが見慣れない形の貨物列車を指さした。

『石炭を搬ぶ汽車さ。』

と團さんが振り返つた。

『成程、石炭だわ。卒堵婆見たやうなものが一箱一箱に立て、ありますね。』

『彼は炭票といつて、炭車の内容を示すものです。今のは短かつたですが、若松へは五六十臺續きの炭車が日に何杯となく來ます。』

と川島さんが教へて呉れた。

『此方は石炭が名物だからね。田鶴子さんも謙一も叔父さんに石炭の事を伺つて置きなさい。』とお父さんが言つた。

『石炭ならお手のものです。石炭即ち福岡縣です。福岡縣即ち工業動力です。日本の商業中心は三十年の中に門司に移りますよ。豪いもんですぜ。門司から博多まで五十哩といふもの殆んど町續きになりました。』

と川島さんは福岡縣の爲めに氣焰を揚げた。

『矢つ張り中心説だらう？』

と團さんが囁き、

『成程、中心説も案外根柢があるね。』

と三輪さんが笑つても、川島さんは感違ひをして、

『根柢が石炭ですから中心ですとも。さうして商工業の中心は國家の中心、國家の中心は世界の中心です。お嬢さんや坊ちゃんを此處まで運搬して來た汽車と聯絡船も石炭あつての話でせう？ 電信電話電車電燈から百般の製造業、何一つ石炭のお蔭を蒙らないものはありません。石炭が日本を動かしてゐます。さうして其石炭は福岡縣——と要するに斯うなるのです。』

『すると石炭屋が一番豪いといふ事に歸着しますね。』

とお父さんが冗談を言った。

「然うです。さうして此叔父さんか其石炭屋です。御覧なさい。這麼に太つてゐる。」

と川島さんは布袋腹を叩いて見せた。

小倉を過ぎると右側は煙突の森林續きだ。煤煙で空が曇つてゐる。

「實際盛んなものですかあ？」
と團さんが感歎した。

「此處は工業地として東洋一といふ評判です。其代り煤煙で家が那麼に眞黒になつて了ひます。八幡は雀まで黒いと申しますからね。櫻だつて満足な色には咲きません。女にしてもお白粉を塗つてゐる間に煤煙を受けますから折角のお化粧の出来上る頃には灰色になるさうです。」



と川島さんの説明は形容に剽輕な誇張があるから印象が深い。

「太つ腹な男さ。那麼風だから損をしても得をしてもケロリとしてゐる。成功してゐるのか失敗してゐるのか分らない。」

とお父さんは折尾で川島さんが下りてから批評した。

「快活で好いね。不平や苦情は瘦せた人の言ふ事さ。」
と團さんが言った。

「妙なところで當てつけるね。」

と三輪さんは聞き捨てにしなかつた。

「そら、もう始まつた。」

九州で大きいのは福岡、町の綺麗なのは長崎、繁華なのは博多——と昨夜散歩をしながら、三輪さんの甥の大學生が定義的に教へて呉れた通り、博多は實際賑かだ。
「福岡と博多は違ふんですか？」

と其時お父さんが訊いた。

「さあ、まあ同じやうなものですな。正確にいふと福岡市は福岡及び博多の兩區より成り立ちます。此故に博多は福岡市の一部分です。然るに停車場は御承知の通り博多にありますから、鐵道方面からいふと博多即ち福岡市です。」

と小三輪生は何でもない事を無暗に六ヶ敷く言ふ。醫科ださうだから、卒業して脈を見る時の心得を今から練習してゐるのらしい。其は然うと博多も殊に僕達の宿の附近は芝居小屋等があつて目貫のところと見えた。田舎銀座の呉服町まで行つて、歸途は参考の爲めとあつて電車に乗つたが、實は博多織だの博多絞だのが動もすると田鶴子さんの足を止めるので、團さんが警戒したのだつた。

「博多人形を買つて行くと宜いのだが、毀れて了ふだらうかね。」

と團さんは娘にまで駈引をする。しかし田鶴子さんは、

「店から直ぐ家へ送らせるから大丈夫だわ。」

と其又上を行つて、人形丈けは大きなのを買つて貰つた。

朝御飯が濟むと直ぐに俵で見物に出掛けた。すべて小三輪生が引き廻しの勞を執つて呉れる。電

車道を一直線に辿つて左にお濠の蓮の花を賞しながら、

「俵屋さん、何聯隊だつたかね？此處は？」

と團さんはソロソロ釘を打ち始めた。

「二十四聯隊でございます。」

と俵屋が答へた。

「聯隊長は矢つ張り彼の大佐がやつてゐるだらうね？」

「やつとりませす。旦那は御存知でございますな。」

間もなく西公園に着いた。

「村岡君、太つた人が苦情を言ひさうな高いところだね。」

と三輪さんが嬉しがつた通り、此公園は平地ぢやない。

「高いところやけん、眺望がよござすばい。」

と言つて俵屋達も跟いて來た。

「此處は此邊唯一の櫻の名所です。春になると毎日ドンタク騒ぎをやりますよ。」

と小三輪さんが説明した。

殿様を祀つた神社があつたが、然るものに頓着する連中でない。山の上は成程海の眺めが佳かつた。何とかといふ可愛い島も見える。風景にも餘り屈託のない一同は直ぐに下りて來た。

「俣屋さん、君達は博奕を打つさうだね？」

と團さんは平野次郎の銅像の前で立ち止まつた。

「とつけむな御冗談ば仰有る。」

と俣屋は驚いた。

「否、何、眞の老婆心さ。しかし用心し給へよ。昨夜警察署長に會つたら、此處の俣屋は博奕を打つて困るから近々手を入ると言つてゐたよ。」

引き返して東公園へ向つた。九州第一の大都會丈けに、端から端まではナカ／＼乗りである。

「オヤ／＼、松が枯れてゐるぢやないか。」

と千代ノ松原に差しかゝつた時三輪さんが呟いた。

「先年から何か病菌がついて、種々と手當をしてゐるやうですが、最早此邊は全滅ですな。人間だ

と内服が利きますけれど、植物は外用丈けです。投薬の範圍の狭いものは其丈け快復が困難と見なければなりません。」

と小三輪生が答へた。先頭の連

中は最早下りて松原を歩き始めた。

日蓮上人の銅像は素晴らしい

ものだ。

「大きな坊さんね！」

と田鶴子さんが感心した。

「像も臺座も三十五尺宛あるけ

ん、日本一ちうてもよかとだす

ばい。」

箱崎八幡は東公園から目と鼻の間だつた。入ると右側に楠の大木がある。「樹木を愛護せよ」とい



華經……」

とお婆さんが五六人頻りにお題

目を唱へてゐる。後方へ廻つて

見たが、此處でも臺座の石を拳

で叩きながら、

「南無妙法蓮華經 南無妙法蓮

華經……」

と一心不乱だ。臺座の石が手垢

で黒くなつてゐる。

ふ立札を読みながら、

『樹木を禮拜せよと書いても宜いくらなるものだ。實に大きい。恐らく日本一だらう。』
と大木好きの三輪さんは何時までも見上げてゐた。

『此八幡さまといひ龜山上皇といひ、此處へ來ると何うやら遠い元寇の昔を偲びますね、もつと歴史に精しいと面白いんでせうけれども。』

とお父さんも多少、感慨を催したやうだつた、

『然うですよ。此邊一帶は元寇の舊蹟で持ち切つてゐます。多々良ノ濱が此海岸傳ひですから、此處らも矢つ張り古戦場かも知れませんね。』
と小三輪生が應じた。

『何うです？ 此處の學生も京都の連中のやうに遊びますか？』
と團さんは現代にばかり興味を持つてゐる。

『京都の連中見たいにノートを質に入れたり其質札を又抵當に置いたりはしませんが、随分遊びますね。殊に醫科が激しいです。五千六千といふ借金を背負つてウン／＼いつてゐるのが大勢ゐます』

よ。

『然塵連中と交際しちや困るぜ。君は兄に似て矢つ張り酒が好きだからね。』
と三輪さんは叔父さんぶりを見せた。

『私は大丈夫ですよ。借金をして酒を飲むでも甘い事はありませんからね。』

『はい、あ、借金と言ひますか、此方では。京阪や中國の人は借金と言ひます。東京は絶對的に借金です。借金借銀借金と中央から遠退くに從つて相場が低下するのは、自ら其土地の文化の程度を示してゐて面白いですな。』

とお父さんが大發明でもしたやうに言つた。

海岸は松原を背後に控へて好い景色だつた。高燈籠のところ、

『多々良ノ濱は彼の見當になります。海上で二十十日の颯風を食つたのですから十萬餘騎の敵も溜りません。それにしても生存者が唯三人とは酷い死亡率です。』

と小三輪生は科學的説明を下した。

歸途醫科大學の前へ出るまでに納豆の苞苴のやうなものを提げて行く人達を幾度も見かけた。

「彼は何でせうね？」

と田鶴子さんは俵の上から僕を顧みた。

「箱崎の濱の砂でござす。あらたな砂ぢやけん、あけんして大切に持ち歸りますばい。」
と僕の俵屋が教へて呉れた。

宿へ戻つて晝御飯を喰べると最早立ち支度だ。ナカ／＼忙しい。

「叔父さんは「わし國」別名「都名所」といふのを御存知ですか？」
と小三輪生が訊いた。

「知らないね。此處の名物のお菓子かい？」

と大三輪生は無學を告白しなければならなかつた。

「否、歌ですよ。此處のは斯ういふんです。「福博名所で見せたいものは……」」

と小三輪生はビールに酔つたのか小聲で語り始めた。

「……九州大學潮湯晴心館、敵國降伏箱崎八幡、元寇記念碑日蓮銅像、荒津山から沖を眺むりや
玄界……沖を眺むりや玄界……」さあ、忘れて了つた。「何が何とかで、外にないぞえ、千代ノ松原

しよんがいな」と、あゝ、骨が折れる。

「本物ですな。これは大分資本が入つてゐますね。」

と團さんは褒め、

「面白いですな。其文句を後から一つ調へて置いて下さい。」

とお父さんは頼むだが、

「秀夫さん、然麼歌が然麼に上手ぢや餘り信用出来ないぜ。」

と三輪さんは稍機嫌が悪かつた。

「大丈夫ですよ。兎に角今の歌の中の名所は悉皆御覧に入れました。ところで最早ソロ／＼時間で
せう。」

と小三輪さんは手首の時計を見た。

夏の雨は馬の背を分けるといふが、全く其通りだ。

「又熊本でお目にかゝります。」

と言つて、博多驛で秀夫さんに別れた時には晴れてゐたやうだったが、一停車場過ぎると大雨沛然